
翡翠の龍・碧の姫

ミニプリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翡翠の龍・碧の姫

【Nコード】

N3220N

【作者名】

ミニプリ

【あらすじ】

アニメ「一騎当千」の呂布奉先&陳宮公台出演の平行作品です。管理人の趣味全開です、呂布は難病にかかっていません、ゾンビ物です。ご注意ください。

あらすじ

各地で死者が蘇り生者に襲いかかるようになり世界は混乱に陥っていた。

阿鼻叫喚となった東京、生存者救出とゾンビ攻撃の為出動した特殊作戦群（SFGp）の長曾我部基久^{ちようそかへもとひさ}一等陸尉と彼が率いる特殊機動

集団「ゴジラ・コマンド」は苦もなくゾンビをなぎはらう美少女、
呂布奉先と出会い行動を共にする。

東京上空

東京上空

阿鼻叫喚の世界が眼下に広がっていた。

道路上には追突した無数の車輛が壁となって点在し無傷の車輪や生存者達の前で無慈悲な壁となっている。

恐慌状態となって逃げ惑う人々の後方から災厄が群れとなって押し寄せて来た。

ユラリッ…ユラリッ…重度の夢遊病者のように覚束無い足取りで歩みを進めているのは変わり果てた姿となった人々の集団であった。白濁しきった角膜が街灯の光を受けて虚に輝き、ボロボロになった衣服から無惨に噛みちぎられた身体が痛々しく覗いている。

虚に光る濁った目と生気の欠片すら感じ取れない足取り…物言わぬ骸となりながらも歩みを止めぬ集団が逃げ遅れた生存者に追いついた瞬間、凄惨な饗宴が始まりを告げた。

手足をばたつかせ必死に抗う生存者に毛ほどの頓着も見せぬまま、生ける骸達はむしゃぶりつくように生存者にまとわりつき、身体の各所に歯をたてて貪り始める。

生きたまま身体を喰われる…身の毛もよだつ苦痛とおぞましさに生存者の口からこの世の物とも思われ無い絶叫が迸る。

道路の各所で吐き気を催す饗宴が続き、夜の都内に絶叫の狂想曲が痛ましく木霊して行く。

その時ローター音を響かせながら、陸上自衛隊の主力中型輸送ヘリコプターUH 60JAが2機、地獄とかした上空を低空で通過した。

「現状はどう控え目に見ても地獄だな…」

窓から凄惨な光景を垣間見た長曽我部基久一等陸尉はそう呟きながら視線を機内へと戻すと無線機のレシーバーを手に取りながら口を開いた。

「ゴジラ・コマンドAよりゴジラ・コマンドB、アルファ只今より生存者救出及び感染者の殲滅に入る。送レ」

長曽我部が通信を送ると間髪入れずに後方のUH 60JAに乗り込んだ特殊機動集団ゴジラ・コマンドのBチームを率いる羽島猛三はしまたけし等陸尉からの声が響いて来た。

「ゴジラ・コマンドBよりA、了解しました。LZ（ランディング・ゾーンの確保）を行います…感染者って言うよりはゾンビって言う方がしつくりきますね、送レ」

長曽我部は羽島の言葉を受けると苦笑を浮かべながら言葉を返す。

「AよりB、LZの指示は追って通達する。噛まれるなよ、お前等がゾンビになったら骨が折れそうだからな。送レ」

「B了、指示を待ちます、終ワリ」

長曽我部は通信を終えると機内の座席で装具の点検を行っているゴジラ・コマンド、Aチーム所属の棚倉隼人たなぐらはやと一等陸曹、御子柴源之丞みこしばげんのじょう二等陸曹、夕月雅三ゆづきみやび等陸曹を見渡しながら口を開いた。

「各自装備に異常は？」

「無し！」返答を受けた長曽我部が小さく頷きながら待機するよう命じていると機体の窓から眼下を偵察していたドアガン要員（ヘリコプターの機体ドア付近に設置した機銃の操作要員）から急報がもたらされた。

「2時の方角に生存者一名発見、現在…す、凄い、ゾンビを次々に叩きのめしています。」

ドアガン要員の言葉を受けた長曽我部は窓に近付き暗視双眼鏡で彼の示した方向を確認した。

翡翠の龍（前書き）

呂布奉先登場です表現がグロ気味ですのでお気をつけ下さい。

翡翠の龍

阿鼻叫喚の地獄絵図の中美しい少女が凄絶な舞いを見せていた。

ツインテールに纏められた翡翠の髪が躍動する肢体の動きにあわせて舞い、街灯の光を浴びてキラキラと輝いている。

ワイルドな美貌の中一際目を惹く翡翠の瞳が不敵な輝きを放ちながらゾンビの姿を見据えている。

素肌の上から直接着込んだレッドブラウンのブレザーに薄い小豆色とレッドブラウンのチェック柄のミニスカートにルーズソックスという目のやり場に困るような装いに包まれた瑞々しく魅惑的な肢体が彼女のワイルドな魅力を更に引き立てる事となっている。

ワイルドな魅力の美少女、洛陽学園三年生・呂布奉先は破滅に瀕した街の中、美しくも凄絶に舞っていた。

上段に放たれた呂布の右足が鞭のようにしなると眼前のゾンビの頭部を捉え、靴先が頭蓋にめり込み、穿ち抜く。

呂布はゾンビが倒れ込む間に蹴りの遠心力を利用して後方に向き直ると左足を蹴り上げ接近していたゾンビの顎を蹴り碎く。呂布は高く掲げた左足を一直線に降下させると顎を碎かれたゾンビの頭部に強烈極まり無い踵落としを喰らわせアスファルトにゾンビの頭部を叩き付け粉碎する。

呂布が再び骸と帰したゾンビを見詰めていると背後から2体のゾンビが接近し、腐敗した腕を伸ばしその魅惑的な肢体を掴み取ろうとする。

ゾンビの指先が呂布のブレザーを掴み取ろうとした刹那呂布の姿が朧気なゾンビの視界から消失する。

突発事態に停止してしまったゾンビの足元にしゃがみこんだ呂布は嘲るような微笑と共に口を開いた。

「残念、お見通しよ」

そう呟きながらウィンクした呂布は左足を軸として身体を回転させ

て強烈な足払いをかける。

常人離れした威力を持つ呂布の足払いを受けたゾンビが身体のパラ
ンスを崩されて薙ぎ倒されてしまう。

呂布は何事も無かったかのように立ち上がると起き上がろうともが
くゾンビに近付くと容赦無く足を踏み降ろし2体の頭部を相次いで
踏み砕いた。

息すら乱さぬまま呂布は周囲を見渡すとゾンビの群れを見据えなが
ら口を開いた。

「あたしを食べたいの？…いいわよ食べても…出来るものならね」

呂布は凄みのある微笑を浮かべながら呟くと手近な所にいるゾンビ
に向けて攻撃を開始した。

「……脱帽だな……」

凄絶な呂布の戦いぶりを見た長曽我部は感嘆の呟きをもらしながら
後続するゴジラコマンドBに通信を送る。

「AよりB確認したか？送レ」

「こちらB確認しました。破天荒な戦闘力ですね。送レ」

「全くだ、彼女の収容に入る。Bは先行してLZを確保事後はAの
支援を行え、LZの指示はヘリに行う。質問はあるか？送レ」

「B了、事後の行動にかかります。送レ」

「A了、レディーの前に出るんだ、身嗜みは整えておけよ。終ワリ」

「B了、おめかししときますよ。終ワル」

羽島との交信を終えた長曽我部は通信機のモードを機内通信に切り
替えると操縦席に座るヘリパイ（ヘリコプター・パイロット）に向
けて言葉を発した。

「こちらゴジラ・リード先程確認した生存者の救出作業に入る。L
Zを指示してくれ。」

「確認地点の前方約200メートルに公園を確認、ゴジラ・コマン
ドBはそちらに移動させる。」

「了解した。Bを先発させた後は高度をなるべく下げてくれ、生存
者への呼び掛けとドアガンによる掃射を実施する……」

「了解、」

長曽我部が機内通信を終了すると間髪入れず後続していたゴジラ・コマンドＢチームを乗せたＵＨ ６０ＪＡが速度を上げて長曽我部達を追い越して行き、それと同時に機体が徐々に高度を下げ始めた。

長曽我部は乗機が高度を下げ、再び水平飛行に移ったのを見計らい、待機しているドアガン要員に向けて口を開いた。

「ドアガン、掃射用意、用意完了後、射撃命令あるまで待機せよ。」
長曽我部の言葉を受けたドアガン要員が弾かれたように行動を開始すると機体左右のドアを大きく開け放つ。

射界が開けた事を確認した射手が機体に備え付けられたブローニングＭ ２、１２・７ミリ機銃通称キヤリバー５０のコッキングレバーを操作して１２・７ミリ弾を薬室へと送り込みつつ独自改修で取り付けた暗視照準スコープを覗き込みながら口を開く。

「右銃射撃準備良し！」

「左銃射撃準備良し！」 長曽我部はドアガン要員の言葉に頷きながらスピーカのスイッチを入れた。

上空から聞こえるローターを耳にした呂布が上空に視線を送ると上空を迷彩塗装されたヘリコプターが通過して行くのが確認された。

「……………自衛隊？」

呂布が訝しげに呟くと同時にローター音を響かせながら先程通過したヘリと同じ機体が接近して来るとホバリングしながらスピーカを通して呂布へと呼びかけて来た。

「こちらは陸上自衛隊です。前方２００メートル付近に小さな公園があります。そちらに移動して下さい。ヘリによる収容を行います。その際、上空より機銃掃射を実施します。直ちに移動して下さい。繰り返します。こちらは陸上自衛隊です。前方……」

呂布はヘリから聞こえた声に対して一瞬考える素振りを見せたが直ぐに結論に達するとヘリコプターに向けて片手を振る事で返答を送ると前方に向けて駆け出した。

「制圧射撃開始！」

呂布が公園に向けて駆け出したのを確認した長曽我部が号令を発するとUH 60JAの機体の左右に突き出されたキャリバー50の銃口からブラストの光と共に無数の12・7ミリ弾が迸り出た。

ローターの轟音に上空を見上げていたゾンビに12・7ミリ弾が雨となつて降り注ぎ、頭部を粉碎する。

曳光弾が真紅の軌跡を引きながらゾンビの群れに降り注ぎ12・7ミリ弾がゾンビを次々に切り裂く。

夜間の機銃掃射という悪条件にも関わらずキャリバー50の銃火はかなりの精度でゾンビの群れに降り注ぎゾンビを粉碎して行く。

長曽我部は暗視双眼鏡でドアガンによる掃射効果を確認すると小さく頷きながらキャリバー50の上に取り付けられた暗視照準スコップに視線を移した。

本来機関銃とは圧倒的な発射速度を利用した掃射射撃が基本戦術であり、精密射撃用のスコップはそれ程必要のある装備では無かった。キャリバー50とて例外では無く高威力の12・7ミリ機銃による掃射射撃が基本戦術であつた。しかしながら1982年に勃発したフォークランド紛争（マルビナス戦争）に於いてアルゼンチン陸軍は照準スコップを取り付ける事でキャリバー50を即製の長距離射撃用狙撃銃として運用し、イギリス陸軍の上陸部隊にかなりの打撃を与える事に成功した。

長曽我部はこの戦訓を利用してドアガンに使用されるキャリバー50に暗視照準スコップを取り付ける独自改修を行い今回の出動に際して実戦テストを行ったのである。

長曽我部達のUH 60JAがキャリバー50の正確な射撃でゾンビを打ち倒してる頃、呂布の目指す先の公園に羽島達を乗せたUH 60JAが降下を実施した。

「Go！」

ヘリが着陸し微かに震えると同時に羽島の口から号令が発せられ、ゴジラコマンドBチームに所属する甲賀源八こうがげんぱち陸曹長に夕月雅の双子

の姉である夕月薫^{ゆうつきかある}一等陸曹、佐竹悟三^{さたけさとる}等陸曹が羽島と共に大地に降り立った。

「1番クリアッ！」

羽島が周囲を確認して声をあげると続いて甲賀達が報告を始める。

「2番クリアッ！」

「3番クリアッ！」

「4番クリアッ！」

羽島は報告を受けると耳に装着した小型無線機に報告を送る。

「ゴジラコマンドBよりゴジラコマンドA、LZ確保、直ちに周辺の掃討にあたります。終ワリ」

「A了、終ワル」

羽島は通信を終えると同時に無線機を隊内通信に切り替えつつ命令を下す。

「4番、狙撃準備、準備出来次第射撃せよ、3番は4番の護衛、2番は1番と共に公園入口を確保、生存者が到着するまでこれを守備する。総員、散開^{フレイク}！！」

羽島の言葉を受けたゴジラ・コマンドBチームは素早く行動へと移った。

特殊作戦群（前書き）

自衛隊VSゾンビです。更新に馴れていないのでご迷惑をおかけしますがどうか御容赦願いますm（――）m

特殊作戦群

薫は擬装網に包まれた大型狙撃銃バーレットM82A1を抱えながら地面に伏せると射撃態勢を整えながら暗視照準眼鏡に右目を当てる。

地面に二脚を依託し、銃床を肩づけした薫は心持ち両足を開き衝撃に対して備えつつ巨大なマズルブレーキが備えつけられた銃口をゾンビに向けた。

暗視照準眼鏡のライトグリーンの視界に標的となるゾンビの頭部を捉えた薫はトリガーに指先をかけると静かにそれを引いた。

刹那マズルフラッシュの閃光が迸り、銃口からキャリバー50と同じ12・7ミリ弾が解き放たれ、それと同時に発生した衝撃が薫の身体を微かに震わせる。

コンマ何秒かのタイムラグを置き標的となったゾンビの頭部がコンクリートに叩き付けられた西瓜のように微塵に砕け、頭部を失った骸が地面へと倒れ込む。

「オン・ターゲット…」

薫の傍らでM 203グレネード弾発射器がセットされたM 4カービンを構えつつ周囲の警戒に当たる佐竹が告げると薫は小さく頷きながらバーレットの射撃を続けた。

マズルフラッシュの閃光が閃く度に標的となったゾンビの頭部が弾け、首だけになった骸がアスファルトの上に投げ出されて行く。

薫が狙撃を続けるなか公園の入口に到着した羽島と甲賀が周囲のゾンビに攻撃を開始する。

羽島がポンプアクション式のショットガンの射撃で数体のゾンビを纏めて射ち倒し、甲賀がM 4のバースト射撃（3発点射）で残るゾンビを片付け、入口の確保に成功する。

「周辺警戒！」

羽島が短く号令を発すると甲賀がM 4を構えたまま口を開く。

「生存者確認！こちらに接近中！」

甲賀の言葉を受けた羽島が視線をそちらに向けると点在する事故車輛をぬうようにしてこちらに駆けてくる呂布の姿が確認された。

「こちらです。急いで下さい！！」

羽島がショットガンを構えつつ叫ぶと呂布がそれに気付いて片手を掲げる。

その瞬間物陰から一体のゾンビが突然現れ呂布に向けて腐敗した手を伸ばす。

甲賀がM 4を構えた瞬間、呂布は近くにあった事故車のボンネットに手を当てると軽業師のように身体を虚空に浮き上がらせながらボンネットにつけた手を軸として浮き上がった肢体を支えつつ強烈な蹴りを喰らわせゾンビの頭部を蹴り跳ばしてしまう。

ヒラリッと着地した呂布が再び駆け出すと同時に頭部を失ったゾンビがアスファルトの上に力無く崩れ落ちていった。

「凄まじいですね…いろんな意味で…」

「全くだ…」

羽島は甲賀の言葉に苦笑しながら同意するように頷く。

呂布が履いているのは今時の女子高生の基準から見ても短めのミニスカート、そんな服装であれだけ激しく動けば当然の事ながらチラリズム等という生易しい表現では到底足りない刺激的な状況になっ

てしまっている。

苦笑を浮かべた羽島と甲賀が周囲に視線を送る中、入口に呂布が到着すると一息つきながら口を開いた。

「フーッ…流石にちよつと疲れたかしら…助かるわ…」

呂布の言葉を受けた羽島は素肌の上に直接ブレザーを着込むという服装に苦笑を浮かべつつ口を開いた。

「御苦労様です。直ぐに収容ヘリが到着します。ご案内します。三等陸尉の羽島猛です。」

呂布が羽島の言葉に頷くと同時に甲賀がM 4を構えつつ口を開いた。

「急ぎましょう。団体様の御到着です。」

甲賀の言葉を受けた羽島が視線を向けるとゾンビの数が加速度的に増えているのが確認された。

羽島はそれを確認すると小さく頷きながら呂布に向けて声をかけた。

「急ぎましょう。」

「OK」

呂布が短く答えると同時に上空を長曽我部達が乗り込むUH 60

JAが通過し、着陸態勢へと入った。

「収容ヘリです。行きましょう。」

羽島はそう言うのと呂布と甲賀を促しつつヘリに向けて駆け出した。

一方着陸したUH 60JAからは長曽我部率いるゴジラ・コマンドAチームの4名が降り立ち個人携行火器を構えつつ近づく羽島達と呂布を迎えた。

「一等陸尉の長曽我部基久です。御無事で何よりです。」

長曽我部の言葉を受けた呂布は不敵な微笑を浮かべながら頷きつつ口を開く。

「洛陽学園三年生の呂布奉先よ。助かったわ」

「先程着陸したヘリに搭乗して下さい。我々はもう少しゾンビを叩いてから乗り組めます。」

長曽我部の言葉を受けた呂布は近づくゾンビの大群を見詰めながら凄みのある微笑を浮かべつつ口を開いた。

「お手並み拝見ね……」

長曽我部は呂布の言葉を受けると涼やかな微笑を浮かべながら頷き、後方のヘリを示しながら言葉を続けた。

「ヘリに……」

「OK」

呂布が駆け出したのを確認した長曽我部は展開するゴジラ・コマンドに向けて命令を下す。

「ゾンビに対する攻撃を開始する。俺と棚倉に羽島と甲賀で前面のゾンビを叩く、雅と薫は火力支援、御子柴と佐竹はアーチェリー・

エスコート及び全周警戒。 がかれ！」

「了！！」

長曽我部の声を受けたゴジラ・コマンドの面々が即座に行動に移る。薫がバーレットの狙撃を再開する中、雅がりボルバー式の六連装グレネードランチャーを構えると接近するゾンビに向けての射撃を開始する。

幾分気の抜ける射撃音と共に発射されたグレネードはゾンビの群れの只中で炸裂し、発生した爆発が何体かのゾンビを一纏めに吹き飛ばす。

雅がグレネードの射撃を浴びせかる傍らではM 4を構えた御子柴が油断無く周囲を見渡し警戒に当たる。

グレネード弾がゾンビの群れの只中で炸裂し始める中、長曽我部は残る三人と共にゾンビの群れの前面に展開して射撃態勢を整える。

「こいつじゃ無理ですね。」

羽島はそう呟きながらショットガンを右肩に吊るすと左肩に吊っていたM 4を構えて近づくゾンビに照準を合わせながら口を開く。

「B 1射撃準備良し」

「B 2同じく」

羽島達に続いてM 203付きのM 4を構えた棚倉が静かに告げる。

「A 2いけます」

長曽我部は報告を受けると軽機関銃MINIMIを構えながら口を開く。

「射撃開始！」

長曽我部の号令と共に四人が構えた銃口にブラストの閃光が閃き、5・56ミリNATO弾が迸り出る。

長曽我部のMINIMIが猛然と吼え、叩き付けるような弾雨がゾンビを薙ぎ倒していく。

残る三人もM 4の射撃を浴びせかけ正確な照準でゾンビの頭部を的確に射ち抜いて行く。

ゾンビの群れの只中でグレネード弾が次々に炸裂し曳光弾の真紅の軌跡が吸い込まれるようにゾンビに降り注ぎ骸に帰したゾンビが折り重なるように倒れていった。

「やるわねえ、あいつら…」

UH 60JAに乗り込んだ呂布が長曽我部達の行動を見詰めながら感嘆の呟きをもらすと暗視照準スコップ付きのキャリバー50を構えた射手が前方から視線を外さぬまま、口を開いた。

「特殊機動集団「ゴジラ・コマンド」…特殊作戦群の中から更に選りすぐられた破壊と生存のプロフェッショナル達です。」

「特殊部隊なんだ…通りで動きに無駄がない訳ね」

呂布は射手の言葉を受けるとそう呟きながら戦闘を続けるゴジラ・コマンドの面々を見据える。

的確な射撃を続ける長曽我部達の前に骸に帰したゾンビが次々に倒れ伏して行くがゾンビは湧水のように次々に姿を現し、ゆつくりと長曽我部達に接近して来る。

更に轟く銃声と爆発に誘われるように別方向から新たなゾンビの集団が出現して佐竹と御子柴が射撃を開始しUH 60JAのドアガンもそれに加わる。

「潮時だな…A1よりゴジラ・コマンド各員へリに向かえ！」

「了」

長曽我部の命令と同時に薫がバレットを抱えながら立ち上がり佐竹の護衛を受けながら駆け出し、雅と御子柴がそれに続く。

雅と御子柴が呂布の乗り込むUH 60JAに近付くと周囲に展開し、雅が駆け寄ってくる長曽我部達を援護する為グレネード弾の射撃をゾンビの群れに叩き込む。

長曽我部達は雅の援護射撃を受けながら素早く機体に近付くと棚倉が御子柴を促しつつ機内に乗り込む、雅はそれを確認すると棚倉達に続いて機内に進み、最後に長曽我部が乗り込むと周囲を見渡し口を開く。

「異常は？」

「無し！」

Aチームからの返答を聞いた長曽我部は無線機のレシーバーを手に取り口を開く。

「AよりB乗り込んだか？送レ」

「B乗り込みました人員異常無し、送レ」

「A了、直ちに離陸せよ。終ワリ」

「B了、終ワル」

長曽我部は通信を終えると直ぐ様モードを切り替えコクピットに通信を送る。

「こちらゴジラ・リード離陸願う…」

「了」

長曽我部の言葉を受けたヘリパイは短く答えると素早くエンジンの出力を上昇させる。

UH 60JAに搭載された石川島播磨製T 700 IHI 4

01Cエンジンが出力を上げローターの回転数が増加し発生した揚力で機体がフワリッと浮かび上がる。

長曽我部達の乗り込むUH 60JAが上昇して行くとBチームの乗り込むUH 60JAが続けて上昇を始め公園から脱出して行く。

2機のUH 60JAが脱出して暫くするとゾンビの群れが到着し公園を瞬く間に埋め尽くしてしまう。

呂布が窓からそれを見詰めていると長曽我部がスポーツ・ドリンクの詰まったペットボトルとチョコレートを差し出しながら声をかけた。

天空よりの一撃（前書き）

GL描写も少しあるのでお気をつけ下さい。

天空よりの一撃

「どうぞ」

長曽我部の言葉を受けた呂布は激しい戦闘の連続に水も口々に飲んでいないことを思い出すと頷きながらペットボトルを受け取り喉を鳴らして甘い液体を飲んだ。

呂布は渴いた身体に甘い液体が染み込む感覚を瞳を閉ざして味わいながら扇情的に喉を鳴らしてスポーツドリンクの大半を一息に飲み干すとチョコレートを口に入れ口内に広がる甘い味を噛み締めるように味わった。

瞬く間にチョコレートを平らげた呂布がペットボトルに残った僅な量のスポーツドリンクを飲み干すと心地ついたようにため息をつきながら口を開く。

「サンキュー、助かったわ…」

呂布の言葉を受けた長曽我部は微笑を浮かべながら頷きつつ窓からゾンビの群れへと視線を送る。

「まったく、倒しても倒してもシラミみたいに出て来るのよね…」

呂布がそう呟くと長曽我部は同意するように頷きながら公園を埋め尽くすゾンビの群れを見詰める。

「どうやらヘリのローター音に反応しているようですね。先程から動こうとしていない…」

長曽我部の言葉を受けた呂布は訝しげな表情を浮かべながら口を開く。

「そう言えばこのヘリ、さっきからホバリングしてるままね…まだ何かあるの？」

長曽我部は呂布の質問に対して頷きながら短く答える。

「ゾンビを叩きます。」

そう言いながら長曽我部はレシーバーを手にとるとコクピットを呼び出した。

「こちらゴジラ・リード、そろそろ頃合いだろう…：パープル・ヴァイパーとヴァイス・ウーファーに連絡を送ってくれ。」

「了」

長曽我部の言葉を受けたヘリパイは短く答えながら無線機のスイッチを入れ、呼び出しを開始した。

パープル・ヴァイパー

「ゴジラ・コマンドAよりパープル・ヴァイパー、^{シエラ}S20、^{ジュリエット}J25ポイントに進出、ゾンビに対する攻撃を実施されまし」

長曽我部達の乗るUH 60JAからの通信がレシーバーに流れコクピットに座るヘリパイ…天龍寺陽華一尉がノンビリとした口調でそれに応じる。

「パープル・ヴァイパーよりゴジラ・コマンドA、了解、手荒く叩く事になるけど問題無いわね、送レ」

「こちらA問題無い、下はゾンビで溢れかえっている。ヴァイス・ウーファーと共に徹底的に叩いてくれ、終ワリ」

「了、終ワル」

通信を終了した陽華は前方のガナー席に座る光彩雪菜三尉に向けて機内通信で声をかけた。

「ユツキー、聞いた通りよ射撃態勢宜しく」

「了解です。」

陽華は冷製な雪菜の声を受けると肩を竦めながら眩きをもらす。

「つれないな」ユツキーは…ここは頑張つて下さいって恋人にエールを送る場面だよー」

「恋人の妄想につき合うつもりはありません…：信頼して、全てを委ねた貴女に言葉をかける必要はありませんから」

「このツンデレちゃんめ」

雪菜の言葉を受けた陽華はそう言いながら表情を緩めたが次の瞬間には獲物を前にした肉食獣のように凄味のある微笑を浮かべつつ口を開いた。

「OKーそれじゃ行くわよ…」

「了」

雪菜が短く応じると陽華は機体を目標に向けて前進させ始めた。石川島播磨製T 700 701Cエンジンが静かに出力を上昇させ機体を滑らかに加速させて行く。

機体に紫色のコブラが描かれた二人の愛機、世界最強クラスの戦闘ヘリコプターAH 64D「ロングボウ・アパッチ」は流れるように滑らかに加速しながら前進を開始した。「パープル・ヴァイパーよりヴァイス・ウーファー、聞いた通りよ、送レ」

愛機を前進させながら通信を送ると機体を純白にカラーリングしたAH 64Dが闇の中から浮かび上がる様に姿を現し陽華達の機体に追従して加速を開始した。

「ヴァイス・ウーファーよりパープル・ヴァイパー、任務を確認しました、そちらに追従します。送レ」

「こちらパープル・ヴァイパーOK〜んじゃま宜しく、終ワリ」

「こちらヴァイス・ウーファー了解しました。終ワル」

純白のAH 64Dのコクピットで陽華との交信を終えたヴァイス・ウーファー…五月雨^{さみだれなき}風沙二尉は苦笑を浮かべながら呟いた。

「彼女、相変わらずね」

苦笑混じりの風沙の声に対してガナーの^{すがもみゆき}巢鴨深雪二曹が明るい声をあげる。

「風沙さんも相変わらずクールビューティーで素敵です。惚れ直しちゃいます。」

「貴女も相変わらずね…」

深雪の言葉を受けた風沙は一瞬だけ柔らかな微笑を浮かべたが次の瞬間には研ぎ澄まされた日本刀のように鋭い光を瞳に宿しつつ口を開いた。

「行くわよ、深雪」

「貴女とならば地獄の果てまでも…」

深雪の言葉を受けた風沙は頷きながら愛機のエンジン出力を上昇させ、機体を加速させた。

2機のAH 64Dは地獄と化した街にエンジン音とローター音を響かせながら目的地に向けてばく進して行った。

一方交信を終えたUH 60JAは依然として公園の上空でホバリングを続け、呂布は手持ちぶさたな様子で眼下に群がるゾンビを見下ろしていた。

（しかし、この数のゾンビ叩くって言ってたけどどうする気なのかしら…）

呂布がそう思いながらゾンビの群れを見下ろしていると長曽我部が窓際に近付くと眼下に視線を向けながら口を開いた。

「こんなろくでも無い所からはサッサとオサラバしたいと思うでしょうが、もう少しお待ち下さい。」

呂布は長曽我部の言葉に対して不敵な微笑を浮かべつつ言葉を返す。「別に構わないわよ、それよりこのゾンビの団体様、どうやって叩く気？」

呂布の言葉を受けた長曽我部は腕時計に視線を送りつつ口を開く。

「もうそろそろ到着する筈ですよ…」

長曽我部がそう言うと、その言葉を合図としたように陽華達が操る2機のAH 64Dがローター音を響かせながら到着した。

雪菜と深雪が暗視ゴーグルで眼下を見渡すと彼女達の動きと連動して機首下面に装備された30ミリチェーン・ガンが獲物を狙う蛇のように動きゾンビの群れへと筒先を向ける。

「攻撃準備よし」

「OK」

雪菜の言葉を受けた陽華は頷きながらヴァイス・ウーファーに向けて命令を下す。

「パープル・ヴァイパーより全機、攻撃開始！オール・ウェポン・フリーズ（全兵器自由使用）！！」

「ファイヤー！」

陽華の命令を受けた雪菜は叩きつけるように言いながらトリガーを操作した。

刹那AH64Dの両翼のパイロンに各2基ずつの総計4基装備された19連装70ミリロケット弾ポッド（ASR）から非誘導式ロケットが次々に発射され噴煙を引き摺りながらゾンビの群れの只中に叩き込まれ連続する爆発がゾンビを薙ぎ払い、吹き飛ばす。

ロケット弾を射耗した雪菜と深雪は攻撃手段に30ミリチェイン・ガンに切り替えると凄まじいばかりの機銃掃射を始め残るゾンビを薙ぎ倒して行く。

やがて2機のAH64Dが攻撃を停止すると眼下を埋め尽くしていたゾンビの群れの姿は無くクレーターだらけの公園に僅かばかりのゾンビが点在しているのが認めらるだけであった。

「凄まじいわね」

その様子を見ていた呂布が苦笑を浮かべながら呟くと長曽我部は頷きながら口を開いた。

「ゾンビの大群に対抗するには重火器部隊による圧倒的火力投射が一番ですからね…戦闘ヘリコプターによる地上掃射はかなり有効のようですね」

長曽我部は一端言葉を区切ると通信機のレシーバーを手にとりコクピットに通信を送る。

「こちら、ゴジラ・リード習志野に帰還する」

「了」

コクピットとの通信を終えた長曽我部は呂布に向き直ると改めて口を開いた。

「駐屯地に帰還します。」

駐屯地の言葉を受けた呂布は小さく頷く事で応じた。

やがて陽華達のAH64Dに護衛されたUH60J A2機は加速しながら地獄と化した街の上空から離脱して行った。

全般状況説明（前書き）

破局の芽は誤認と言う培養器のなかでぬくぬくと育っていった…パ
ウル・カレル「焦土作戦」より抜粋…

状況説明です。

全般状況説明

発端はアメリカ合衆国西部の地方都市から始まった。

死んだ筈の者が再び動き出し生者を貪る。B級ホラー映画まがいのニュースを受けた世界の反応は極めて冷淡な物であった。当事者たるアメリカ合衆国ですら同じ思いであつたらしく対策に乗り出すのに時間がかかり、封じ込めに失敗する事となった。

元凶となつた地方都市は人口5万人、発生したゾンビはねずみ算式に数を増加させながら街を飲み込んで行つた。

初動に遅れたアメリカ政府は慌てて対応に乗り出し地方都市の周囲を州兵部隊にて封鎖したものの、時既に遅くかなりの数の住人が周辺地域に避難をしており、その中にはゾンビに噛まれた者も紛れ込んでいた。

発生から一週間がたつとロサンゼルス、サンディエゴといった西海岸南部の主要都市にまでゾンビが拡大、更に東海岸にて新たにゾンビが発生した。西海岸では辛うじて海外流出を食い止めたアメリカ政府だったが東海岸では発生源がメガロポリスだった事もあり封鎖に失敗、噛まれた者を乗せた国際線旅客機複数がヨーロッパ各地に飛来しロンドン、パリ、マドリード等でゾンビが発生、ヨーロッパ各地にまで混乱が拡大する事となった。

混乱に陥る各国は泥縄式ながらゾンビ対策に乗り出して行き、発生源のアメリカでは海外派遣部隊の一部を本土に呼び戻し、徹底的なゾンビ殲滅作戦が展開された。

世界が混乱に陥る中、日本は幸運にもゾンビの災厄を免れていたがその幸運はゾンビに対する認識不足を招くという不幸へと繋がっていった。

ゾンビ発生から一ヶ月、世界がゾンビの存在を信じざるを得なくなつたこの時期においてすら日本なゾンビの存在に対して否定的であり、ゾンビ殲滅作戦を実行中のアメリカに対して感染者に配慮した

対策を取るよう申し入れるという有様であった。

ひ弱な感染者を武力で排除する…というイメージを脱ぎ捨てきれない日本では在日米軍に対する抗議デモが頻発し「感染者を救う会」なる集団まで現れてしまっていた。

「感染者を救う会」代表からの提言や連立与党内部からの献策を受けた総理大臣は「もし、感染者が発生した航空機若しくは船舶が日本への避難を求めた場合は人道的見地からそれを受け入れる。」と言う信じがたい宣言を発令する事となる。（民放各局及びNHKによる世論調査の賛成率平均68%）

陸海空自衛隊はこれを受け日本でのゾンビ発生の危険性が高まったと判断すると秘密裏に統合幕僚会議を召集し、ゾンビ発生時に於ける行動方針、「緊急対処計画QZ」の作成を開始、隊員に対する外出自粛命令や駐屯地への弾薬搬入を開始し災厄に備えた。

それから3週間が経過し情勢は更なる動きを見せた。

先ず中国西部で大規模な暴動事件が多発、中国政府の沈静化宣言とは裏腹に混乱は拡大、インターネット等での情報投稿からゾンビの発生が確認された。

ゾンビは瞬く間に中国沿岸部にまで浸透して行き、遂にその時が訪れた。

その日混乱する上海から脱出した旅客機4機（羽田行、成田行、セントレア行、関空行）にて感染者発生の緊急連絡がおこる。

航空幕僚長は直ちに撃墜を決意、築城第8航空団からF 2支援戦闘機4機、新田原第5航空団からF 15SE「サイレント・イーグル」4機が緊急発進をかけるが防衛大臣の命令により航空幕僚長は罷免され同行して来た警察官達によって逮捕される事となる。

出撃した機体の内F 2の2機編隊が旅客機を捕捉するもののパイロット達は射撃を躊躇し帰投命令を受け基地へ帰投したが後日

「あの時、撃墜しておけば…」

と言に残し、2名とも訓練飛行の際の事故で殉職した。（事故では無く故意に海面に突入したとの説もあるが精細は不明）

そして4機は目的地に到着すると厚生労働省から派遣された医師団及び警官隊に出迎えられた。

機内に入った彼らが見たのは機内を彷徨き回るゾンビと噛まれて泣き叫ぶ乗客の姿であった。

各地の警官隊は何かゾンビ及びケガ人の收容拘束に成功すると兼ねてからの予定通り都内若しくは市内各地の指定医療施設へとゾンビやケガ人（噛まれた警官多数を含む。）を收容した。

政府は感染者の治療及び研究を実施すると共に航空自衛隊の暴走を受けて航空自衛隊だけで無く陸海空自衛隊に対する警察の一斉捜査を命じた。

命令を受けた警察庁と警視庁が直ちに全国一斉捜査の準備に入る中、恐れていた事態が現実となった。

感染者を收容していた医療施設全て（都内12箇所、名古屋、大阪各5箇所）でゾンビが増殖、瞬く間に数を増加させたゾンビの群れは病院から溢れだし、周辺に集まった野次馬達へと襲い掛かり、病院の視察とお詫びに訪れた総理大臣と防衛大臣もSPごとゾンビのエサとなった。

ゾンビ流出から2時間後ゾンビの数は都内だけで万を突破し加速度的に数を増やしながら住民へと襲い掛かった。

ゾンビの大群は都内各地を蹂躪し、その一部が国会議事堂を襲撃、国会議員260名が犠牲となってしまう。

更に大群は都内の自衛隊駐屯地にも襲い掛かり練馬、朝霞、大宮の各駐屯地が壊滅的な打撃を受け首都防衛の要とも言える第1師団の第1及び第32普通科連隊が壊滅し、朝霞に置かれた陸上自衛隊東部方面隊（第1師団、第12空中機動旅団基幹）総監部（司令部）が機能を停止し東部方面隊総監（司令官）木地本匠陸将が行方不明（MIA）となる。

陸海空自衛隊の長たる内閣総理大臣と防衛大臣は視察に赴いた病院でゾンビのエサになり、防衛省はゾンビに飲み込まれる。八方塞がりのような状態の東京であったが朝霞駐屯地に所属していた中央即

応集団司令部が神奈川のキャンプ座間に移動し中央即応集団司令官
三橋龍蔵陸将が臨時に東部方面隊の指揮をとる事となった。
三橋は封鎖網の構築を命じる一方中央即応集団隷下部隊の特殊作戦
群に都内の偵察及び生存者救出を命令、出撃した特殊作戦群の一部
隊が最初の生存者を収容する事に成功した。

共同戦線（前書き）

本編再開です（（（^^；）

共同戦線

離脱する途中で2機のAH 64Dは補給の為東京湾に進出して臨時に陸上自衛隊ヘリコプター用母艦として活動している海上自衛隊の航空護衛艦「ひゅうが」へと移動して行き、ゴジラ・コマンドを乗せたUH 60JAは習志野駐屯地を目指し飛行を続け、機内では緊張から開放された呂布が大きく伸びをして開放感を味わっていた。

「んん、人心地ついたって感じね」

大きく伸びをする事でブレザーに包まれただけの瑞々しい上半身が強調され雅が苦笑を浮かべながら口を開く。

「しかし、女性の多くに喧嘩売ってるようなプロポーションね」
雅の言葉を受けたゴジラ・コマンドAチームの面々も苦笑を浮かべつつ同意するように頷いた時コクピットから急報が入る。

「ゴジラ・リードいるか？」

機内通信を受けた長曽我部は表情を引き締めながらコクピットに向けて言葉を返す。

「どうした？」

「都境の封鎖ラインにゾンビが接近している…かなりの規模らしい。」

コクピットからの言葉を受けた長曽我部は即座に言葉を発する。

「習志野に向かう前に封鎖ラインの近くで我々を降ろしてくれ。ゴジラ・コマンドBには今から伝える。」

「了」

コクピットとの通信を終えた長曽我部は機内を見渡しながら命令を下す。

「都境の封鎖ラインにゾンビが接近中だ、武器を点検してくれ。」

「了」

言葉を受けた刹那Aチームの面々は表情を引き締め個人携行火器

の点検作業に入る。

長曽我部は傍らの呂布に視線を送ると申し訳なさそうに口を開いた。
「お聞きの通りです。駐屯地に向かう前に少し寄り道をします。呂布さんには我々が封鎖ラインに降りた後に、駐屯地に向かってもらう事になります。」

長曽我部の言葉を受けた呂布は頭を振ると凄みのある微笑を浮かべながら口を開いた。

「あたしも降りるわ、人手は多い方がいいでしょ、それにヘリの援護も必要なんじゃない？」

長曽我部は呂布の言葉を受けると苦笑を浮かべつつ言葉を返す。

「確かに…正直な所猫の手でも借りたい程の事態ですがね…」

「じゃあ、決まりね、間違つて射たれないよう気をつけるわ」

呂布が軽くウインクしながら口を閉ざすと長曽我部は小さく頷きながらゴジラ・コマンドBに通信を送る。

「AよりB、封鎖ラインにゾンビの団体様が接近している。俺達も迎撃に協力する。終ワリ」

「B了。終ワル」

通信を終えた長曽我部は引き続いてコクピットに連絡を送り着陸地点を確認した後、Aチームを見渡しつつ口を開く。

「10分後に着陸する。」

「了!!」

長曽我部はAチームの返答に頷きながら負い紐で吊っていた国産マシンガンSMG機関拳銃を身体から外し、呂布へと手渡した。

「操作方法は着陸した後教えます。」

呂布は長曽我部の言葉を受けると微笑を浮かべながら機関拳銃を受け取ると負い紐を肩に回して右肩に吊るした。

「こんな状況だから、ありがたく借りとくわね…」

「どうぞ、予備弾倉入れです。」

呂布は長曽我部から予備弾倉4本の入った予備弾倉ケースを頷きながら受け取るとバンドを腰に回してしっかりと身体に固定した。

呂布が準備を整え終わるとそれを合図としたようにU H 60JA
が降下を開始した。

「呂布さんは自分達に続いて降りて下さい。」

長曽我部の言葉に呂布が小さく頷く事で応じていると雅が自分の機
関拳銃用予備弾倉入れから予備弾倉を2本取り出し呂布のブレザー
のポケットに挟じ込むとグレネードランチャーを叩きながら笑顔を
浮かべる。

「あたしにはこれがあるからね…宜しく呂布ちゃん」

雅はそう言いながら握りこぶしを呂布の前に突き出す。

「OK、こつちこそ、宜しく」

呂布はウィンクしながら応じると自分も握りこぶしを突き出し雅の
それに軽く重ねた。

それを見た長曽我部達も同じように握りこぶしを突き出した。

「生き残るぞ！」

「了!!!」

長曽我部の言葉にAチームの三人と呂布が小気味良く応じ、次い
で全員がこぶしに軽く力を込め押し合った後に元の状態へと戻る。

そしてそれを見計らったかのようにU H 60JAが着陸を行い機
体が微かに揺れ、ドアガン要員が機体のドアを開いた。

「行くぞ」

間髪入れずに長曽我部が命令を放ち、Aチームと呂布は大地へと
降り立った。

長曽我部達と呂布が降り立つのに相前後してゴジラ・コマンドBテ
ィームを乗せたU H 60JAが着陸し羽島以下四人が降り立ち素
早く長曽我部達に合流してきた。

「ありや、新人隊員さんですか？」

呂布が装備した機関拳銃を見つけた羽島が笑いながら口を開くと呂
布はウィンクしながら軽く敬礼して見せる。

「宜しくね」

「こちらこそ」

呂布の敬礼に対して羽島は笑顔を浮かべながら敬礼を返し、ゴジラ・コマンドの面々から笑い声があがる。

「全員異状は？」

「「無し!!」」

長曽我部は羽島達の返答に頷くと出迎えの自衛官の後方に見えるテントへと視線を向けながら言葉を続ける。

「大隊本部に向かう。総員同地にて待機、雅、呂布さんにSMG（機関拳銃）の操作を教えておいてくれ」

「「了!!」」

長曽我部は皆の答えを受けると出迎えに来た自衛官に案内されて千葉県と東京都の境界線を封鎖中の第1空挺団第3空挺大隊の大隊本部が置かれたテントに向けて歩を進めた。

封鎖ライン強化（前書き）

補足

作中で長曽我部一尉の台詞にある666とはミニプリの考えたオ리지ナル部隊である第666対戦車ヘリコプター隊の事で、陸上自衛隊の保有するAH 64D全て（13機）で編成されており、現在は海上自衛隊の航空護衛艦「ひゅうが」を臨時の拠点として活動しています。

封鎖ライン強化

「よう、長曽我部、まだ生きてるみたいだな。」

長曽我部がテントの中に入るとテーブルに広げられた地図を見詰めていた第3空挺大隊長の地獄谷大和じごくやまとと二佐が笑顔を浮かべながら長曽我部を迎える。

「相変わらずですね、教官殿。」

長曽我部が微笑と共に敬礼すると地獄谷は答礼しながら言葉を返す。

「もう10年以上も昔の話だな。四方山話よもやまばなしの一つでもしたい所だが
そう言う訳にもいかん、本題に入るぞ。」

「了」

長曽我部は地獄谷の言葉に頷きながら地図に記入された布陣の状況を確認する。

「現在第3大隊は2個中隊を前面に展開させ都境付近の幹線道路上に簡易バリケードを設置し避難民の収容及びゾンビへの警戒にあたっている。予備戦力として第7中隊と空挺施設中隊から派遣された戦闘施設1個小隊が大隊本部周辺に展開中、火力支援として空挺特科大隊第2中隊の120迫（120ミリ重迫撃砲RT）12門が後方に展開している。」

「航空支援はどうですか？「ひゅうが」が666の臨時母艦として活動中ですが？」

「要請は出した。」

地獄谷は長曽我部の言葉を受けると頭を振りながら言葉を続ける。

「神奈川方面の都境でもゾンビの進攻が確認された。神奈川方面の封鎖に当たっているのは第1施設団の第4施設群と演習参加で壊滅を免れた1普連（第1普通科連隊）と32普連（第32普通科連隊）の各1個中隊からなる混成部隊でまともな火力支援部隊は普通科中隊所属の迫撃砲小隊が1個つつあるただ優先度は明らかに向こうだな。」

地獄谷の説明を受けた長曽我部は同意するように頷きを返しながら口を開く。

「我々の行動についてですが？」

長曽我部の疑問を受けた地獄谷は頷きつつ地図を指示棒でつつきながら口を開いた。

「現在ゾンビの群は幹線道路にそって接近中だが防衛ラインの側面に進出されてしまう可能性も捨てきれん。かといって予備戦力の第7中隊全てで側面を固める訳にもいかん。そこで第7中隊の1個小隊と戦闘施設小隊で封鎖ライン側面を固める事にした。お前達には側面部隊の補強を頼みたい。第7中隊の迫撃砲小隊が火力支援を行う。以上だ。質問は？」

「無し。」

長曽我部が小気味良く答えると地獄谷は大きく頷きながら微笑を浮かべる。

「よし、では行ってこい長曽我部学生」

「行ってまいります。地獄谷教官殿。」

地獄谷の言葉を受けた長曽我部は涼やかな微笑を浮かべつつ見事な敬礼と共に地獄谷の前を辞していった。

「そう言えば大隊長は防大（防衛大学校）の教官をされていましたね。」

長曽我部が立ち去るのを見ていた副大隊長の言葉に対して地獄谷は頷きながら言葉を返した。

「今までの教えて来た中で文句無くNo.1の実力の持ち主だな…」

「合同演習に参加したグリーンベレー隊員（アメリカ陸軍特殊部隊）から畏敬を籠めて「サムライ・ソード」と呼ばれた特戦群のエース、あいつは空挺団時代からずば抜けてましたからね」

「ああ、奴なら側面を確実に守り抜けるだろう」

地獄谷はそう言うのと視線を地図へと戻し、ゾンビとの戦闘に向けて封鎖ライン強化の方法を模索しはじめた。

長曽我部が大隊本部のテントを出て待機しているゴジラ・コマンド

の所に戻ると雅のレクチャーを受けた呂布が機関拳銃の装填動作を演練している所であった。

流れる様な動作で弾倉を機関拳銃に叩き込んだ呂布がコッキングレバーを操作し9ミリパラベラム弾を薬室へと装填し、セクターをフルオートに移動させながら銃口を前方へと突き出すと雅が満足したように頷きながら笑顔を浮かべる。

「上出来、上出来、後は引き金を引けばOKよ。飲み込み早くて助かるわ」雅の言葉を受けた呂布はセクターを安全装置の位置に移動させると微笑を浮かべながら頷いた。

「教官が優秀だと、生徒も優秀になるもんなのよ」

「嬉しい事言ってくれるわね…」

雅が呂布の言葉に頷いていると近付いてくる長曽我部の姿に気付いた羽島が鋭い号令を放った。

「気を付け！」

羽島の声が響いた瞬間、和やかな表情で雅と呂布の会話を見詰めていた面々は表情を引き締めながら直立の姿勢をとる。

「楽にしろ、方針が決定した…」

長曽我部は一度言葉を区切ると一同を見渡しつつ言葉を続ける。「我々は第7中隊の1個小隊と戦闘施設小隊が固めている封鎖ライン側面部に向かい側面の封鎖を強化する。」

長曽我部が説明している間に第3大隊から派遣された高機動車^{ハマー}が近付いて来るとブレーキ音を立てながら停車した。

「よし、乗車！」

高機動車が停車した事を確認した長曽我部が鋭く命令を下すとゴジラ・コマンドの面々が素早く散り高機動車の後部座席に次々に乗り込む。

部下の乗車を確認した長曽我部が呂布に視線を向けると呂布は微笑を浮かべながら頷き、軽い身のこなしで後部座席へと乗り込む。全員の乗車を確認した長曽我部が最後に乗り込むと高機動車は微かに身震いしながら前進を開始した。

暫くすると高機動車が停車し、運転席に座る隊員が長曽我部に向けて頷きかける。

「よし、下車！」

長曽我部の声を受けゴジラ・コマンドと呂布が素早く地面へと降りて行った。

長曽我部達が地面に降りると既に到着していた第7中隊の第4小隊と戦闘施設小隊が周辺に展開し警戒にあたっていた。

長曽我部達は地面に降りると素早く装備を整えると前進を始め、停車している軽装甲機動車の傍らにいた小隊長の牟田口錬治三尉の元へと到着した。

ゾンビ襲来（前書き）

封鎖ラインにもゾンビが接近して来ました。

ゾンビ襲来

牟田口は近付いてくる長曽我部の姿を確認すると苦々し気に顔をしかめさせながら洪々といった様子で敬礼を送る。

「側面封鎖ラインの強化を要請された。現状について報告して欲しい。」

長曽我部の言葉を受けた牟田口は小さく鼻を鳴らしながら言葉を発した。

「現在小隊と戦闘施設小隊で側道周辺を封鎖している。」

「迫撃砲小隊への連絡は？」

長曽我部の言葉に対して牟田口は表情に侮蔑の色を浮かべながら返答する。

「要は凶暴化した暴徒なのだろうが…迫撃砲まで持ち出すなど大袈裟だ。火力支援等必要無い」

牟田口の言葉を受けた長曽我部は肩を竦めながら言葉を返す。

「そのような認識不足が大怪我に繋がる。」

長曽我部の言葉に対して牟田口は気色ばんだ様子で噛みつくように言い返す。

「直ぐに火力支援火力支援と騒ぎたてるのは軟弱な証だ。貴様は才レより階級が上だが…指揮官はオレだ…方針には従ってもらうぞ！」

激しい口調で言う牟田口を見つめる呂布は白けた表情を浮かべながらポツリと呟いた。

「ねえ、あの馬鹿殺しちや駄目？」

「気持ちとは分かりますが無しの方向でお願いします。」

呂布の言葉を受けた特殊作戦群の面々が答える前に、近付いて来た第4小隊先任陸曹の宮崎繁三みやざきしげさぶろ陸曹長が苦笑を浮かべながら返答する。

「まあ、一度戦ってみれば少しは理解出来るんじゃないですかね…恐らくですがね…」

宮崎の言葉に対して呂布は肩を竦めながら口を開く。

「一度戦って理解出来なきや真正正銘の馬鹿ね。」

呂布の言葉に苦笑を浮かべながら頷いた宮崎は表情を鋭くさせながら言葉を続ける。

「ゾンビへの攻撃法ですが：やはり頭部しかありませんか？」

「無いわね……」

呂布は宮崎の言葉に対して頷きながら応じる。

「アキレス腱を切断したりすれば歩けなくはなるけど這いずってでも移動してくるわ、目は見えてるみたいだけど、はつきりと視認している訳では無さそうだから聴覚なんかの補助程度じゃないかしら、倒す方法は頭を潰すか、粉々に吹き飛ばすかナパーム弾なんかで焼き尽くすか：そう言った所かしら、意外に力あるみたいだから注意した方がいいわよ。組み合わせない方がいいわ。接近戦に巻き込まれた場合は自信のある者意外はリーチの長い武器を使用すべきね。」

宮崎は呂布の説明に頷きながら感心したように呟きをもらす。

「長曽我部一尉が武器を持たせているので余程の実力者だと思いますが、やはり：非常に参考になります。小隊に伝達しておきます。」

宮崎が敬礼しながら去って行くと牟田口との不毛な会談を終えた長曽我部が呂布やゴジラ・コマンドの面々の元へと歩を進めて来た。

「我々は第4小隊と戦闘施設小隊の間隙を補強しつつ状況に応じて両隊の援護に向かう事になった。」

長曽我部の言葉に羽島達が頷くと呂布が手をあげながら口を開いた。
「今見た感じだと第4小隊がビミョーなんだけど、あの馬鹿小隊長、なんかポカやらかしそうだし」

遠慮無い呂布の言葉を受けた長曽我部は苦笑を浮かべながら頷いたが次の瞬間には表情を鋭くさせながら肩からMINIMIを外すと呂布へと差し出した。

「……………つたく人使いが荒いわね……」

呂布は凄みのある微笑を浮かべつつMINIMIを受け取ると機関拳銃を左肩に移動させ、次いでMINIMIの負い紐を右肩にかけ

その質量を感じ取りながら軽くウィンクをして見せた。

長曽我部は呂布の言葉に頷きながら装填動作と安全装置の使用方を手早く伝える。

一通りのレクチャーを受け終えた呂布が長曽我部達と共に待機に入ると宮崎陸曹長が数名の自衛官を引き連れて近付いて来た。

「迫撃砲小隊の射撃観測班の連中です。どうも小隊長には無用な部隊らしいので…」

宮崎がニヤリツと笑いながら告げるとゴジラ・コマンドの面々が笑い声をあげる。

「よく分かった…有り難く使わせてもらうよ、我々への火力支援用にね…」

長曽我部の言葉を受けた宮崎が頷きながら小隊の方へと戻って行く。と長曽我部は観測班の校倉一曹と話を進め後方に展開中の第7中隊迫撃砲小隊からの火力支援を受ける算段を取りつけた。

それらの準備が終わり暫くすると遙か前方から爆発音が幾度となく発生した。

「120迫ですね…どうやらゾンビの群れが封鎖ラインに接近して来たらしい」

爆発音を耳にした羽島が小さく呟き長曽我部が頷いた刹那無線機に大隊本部からの緊急連絡が飛び込んで来た。

「習志野0より習志野2習志野0より習志野2ゾンビの集団が封鎖ライン前面に襲来し現在阻止砲撃及び防御戦闘実施中、上空偵察への報告によれば側道にも相当規模の集団が接近中、警戒されたい、終ワリ」

「習志野2了、終ワル」

通信が終了したのを確認した長曽我部は校倉に視線を送りながら口を開く。

「小隊に射撃データを送ってくれ。照明弾についても頼む。」
「了」

長曽我部の言葉を受けた校倉は敬礼すると部下と共に射撃用のデー

夕を後方の迫撃砲小隊へと送る。

更に暫く時間が過ぎた時、呂布の耳に耳障りなあの呻き声の木霊が聞こえて来た。

「校倉、照明弾発射」

長曾我部の言葉から数秒後、ヒュルヒュルヒュル…と言う独特の風切り音が届き、上空で照明弾が炸裂し周囲を照らす。

照明弾の淡い光の下、耳障りな呻き声をあげるゾンビの集団が不安定な足取りで接近して来るのが確認された。

危機（前書き）

自衛隊VSゾンビ第2弾です。

危機

「校倉！砲撃開始！あの数とともにやり合えばこちらは無事ではすまん！標定射撃無しで効力射にて砲撃開始、狙いをつける暇も必要も無い！」

「了！」

長曽我部の言葉を受けた校倉は叩きつけるように応じると迫撃砲小隊に連絡を送る。

暫くする再び独特の風切り音が聞こえるとゾンビの群の只中、四ヶ所で爆炎が弾けゾンビが数体纏めて薙ぎ倒される。

数秒の間を置き再び風切り音が発生し微妙にずれた地点で爆炎が生じる。

側道封鎖部隊の後方では展開した迫撃砲小隊が保有する4門の81ミリ迫撃砲L16を展開させ砲撃を続けていた。

砲口に迫撃砲弾をあてがった隊員が命令に合わせて静かに砲身内部に迫撃砲弾を投下すると迫撃砲は小さく身震いしながら砲弾を虚空へ弾き飛ばしゾンビの只中で炸裂して行く。

雨のように降り注ぐ（81ミリ迫撃砲の発射速度は毎分15発程度）迫撃砲弾がゾンビの只中で炸裂し近づくゾンビを次々に吹き飛ばしていく中、無線機から牟田口のわめき声が流れ出す。

「どういづつもりだ長曽我部！火力支援は必要無いと言った筈だ！」

「習志野2こちらゴジラ・リード、交信規定くらいは遵守してくれ、後下らん事で一々連絡をするな指揮官風を吹かすならサッサと射撃を命令しろ、終ワル」

「随分嫌われてるわね…」

通信を終えた長曽我部は呂布の言葉に対して肩を竦めながら応じる。

「そのようですね…身に覚えは全くありませんがね…」

その言葉を受けた呂布は暫く思案にくれた後、何かに思い到った様子で口を開いた。

「所であんた年幾つ？」

「突然ですね、今年30になりましたがそれが何か？」

「あの馬鹿小隊長は？」

「……確か34くらいでしたね、防大出身だそうですですが防大時代に面識はありませんでしたし……」

「それよ……」

呂布は長曽我部の言葉を受けると呆れたような口調で言葉が続ける。

「あんたはポンポン昇進してんのにあの馬鹿はずっと三尉止まり……いやねえ、男の嫉妬って……」

「同感です。」

長曽我部が頷きながら呟いていると後方から轟音が轟き、接近して来たゾンビの頭部が弾け飛ぶ。

呂布が後方に視線を向けると射撃態勢を整えた薫がバーレットの照準眼鏡を覗きこんでいるのが確認された。

呂布は直ぐに視線を前方に移すとMINIMIのコッキングレバーに手を添えながら長曽我部に声をかける。

「そろそろかしら……」

「弾込めをして下さい。」

「OK」

長曽我部の言葉を受けた呂布はコッキングレバーを操作し5・56ミリNATO弾を薬室へと送り込む。

長曽我部は小さく頷くとゴジラ・コマンドに向けて命令を下す。

「ゴジラ・リードより各自射撃用意」

その言葉を受けたゴジラ・コマンドの面々が個人携行火器の筒先をゾンビの群れへと向ける。

長曽我部が攻撃開始を命令しようとした瞬間無線機から牟田口の声が響き渡る。

「習志野2より各自、習志野2は突撃を敢行する。戦闘施設及びゴジラ・コマンドは支援射撃を実施せよ」

「あの馬鹿……」

長曽我部は吐き捨てるように呟くと傍らの戦闘施設小隊に視線を送る。

戦闘施設小隊は困惑した様子ではあったが戦闘配置についた場所から動く事無く射撃態勢を整えていた。

「不味いわよ長曽我部：第4小隊、マジで突っ込む気よ…」

呂布が顔をしかめさせながら呟くのを聞いた長曽我部は舌打ちしながら無線機に手を伸ばすと牟田口に向けて呼び掛けを始める。

「ゴジラ・リードより習志野2というつもりだ、送レ」

それに対して答える変わりに牟田口の耳障りな声が無線機から迸る。

「習志野2はこれより突撃を開始する。戦闘施設及びゴジラ・コマンドは支援射撃を実施せよ。突撃！」

その言葉と共に牟田口を先頭に第4小隊がゾンビの群れに向けて突撃を開始する。

「クソツタレ！ゴジラ・リードよりゴジラ・コマンドB、第4小隊の側面に進出せよ、ゾンビを間隙に潜り込ませるな！！」

「B、了！」

叩き付けるような声と共に羽島、甲賀、佐竹の三名が第4小隊の側面に展開し射撃を開始する。

「ゴジラ・リードよりゴジラ・コマンドA、射撃開始！」

続けて発せられた命令を受け、棚倉、御子柴、雅が接近して来るゾンビに向けて射撃を開始した。

雅と棚倉の放つグレネード弾がゾンビの只中で炸裂し曳光弾の軌跡がゾンビを薙ぎ払って行く。

呂布がその様子を眺めていると長曽我部は視線を前方に固定したまま口を開く。

「：第4小隊で問題が起こった際は：頼みます。」

「このラインまで後退させればいいのね？」

「申し訳ありませんがお願いします。」

「まあ、やれるだけはやって見るわ」

呂布はそう言うときMINIMIを抱えながら第4小隊が突撃した先

に向けて駆け出していった。

第4小隊指揮班

牟田口を先頭にした第4小隊指揮班はゾンビの群れの近くに進出すると個人携行火器をゾンビへと向ける。

「攻撃開始！」

牟田口は小隊全員の到着を待たず指揮班の4名のみでの攻撃開始を命令すると折曲式銃床型の89式小銃を構えるとバースト射撃にて射撃を始める。

至近距離からの射撃は的確にゾンビを捉え頭部を5・56ミリNATO弾で穿ち抜かれたゾンビがアスファルトに崩れ落ちて行く。

指揮班の隊員達も89式小銃やMINIMIで攻撃を始めるが余りに距離が近すぎる為にゾンビが易々と接近してくる。

第4小隊の主力も到着するが指揮班が余りに突出しているための確な援護射撃が行えないでいる。

「小隊長、一度後退します。距離が近すぎます。」

宮崎が89式小銃を射ちまくりながら伝えると牟田口は血相を変えて答える。

「ふざけるな、たかがゾン……ッ」

怒りの余りに視線を前方から外した隙をつき牟田口にゾンビの腕が絡み突くとその牙が迷彩服越しに身体へと突き刺さる。

「……………！！」

あまりの激痛に声にならない叫び声をあげる牟田口に更に数体のゾンビがまとわりつくとも迷彩服に歯を突きたてて行く。

「……は、離せ、は、はな……っがッガアアッ……！」

牟田口が断末魔の悲鳴をあげる傍らでは指揮班員の一人が喉元を噛みちぎられ鮮血を迸らせていた。班員の手からMINIMIが滑り落ちアスファルト上に虚しく転がる。

（因果応報だ畜生め！）

牟田口の最期を見た宮崎は内心で毒づきながら生き残りの班員と共に後退をしようとするがゾンビの群れが近すぎる為にそれすら困難

な状況であつた。

宮崎が舌打ちした瞬間宮崎の耳に装着されたレシーバーに鮮烈な言葉が流れた。

「死にたく無いなら、伏せなさい!!」

激闘（前書き）

戦闘が本格化していきます。

激闘

その言葉を耳にした宮崎と班員が身を伏せた瞬間、頭上を曳光弾が通過し近寄るゾンビが薙ぎ倒される。

ゾンビが次々に倒れ込んだのを確認した呂布は射撃を中断すると指揮班の展開する近くへと駆け寄った。

呂布は絶命した指揮班員の傍らに駆け寄ると早くも動きだしている班員の側頭部に蹴りを見舞い永遠の眠りに誘いつつ路上に転がるMINIMIを拾い上げる。

呂布は2丁のMINIMIを両脇でガツシリと抱えながら接近するゾンビを見据えたがと先頭を進んで来る牟田口ゾンビに気付くと溜め息と共に呟いた。

「ゾンビになつてまで手間かけさせないで欲しいわね……」

そう言いながら呂布は両手のトリガーを引き絞る。

銃口にマズル・フラッシュが閃き連射の衝撃を受け止める呂布の瑞々しい肢体が微かに震えた。

空薬莢とリンクが虚空に飛び散り、照明弾の光を浴びた薬莢がダイヤモンドダストのような煌めきを放つ。

発射された5・56ミリNATO弾は牟田口ゾンビに豪雨のように叩きつけられ周囲を進むゾンビ数体ごと頭部を粉碎させてしまう。

呂布は両脇でMINIMIを固定したまま腰を使って上体を左右に振り、近づくゾンビの集団にまんべんなく5・56ミリNATO弾の掃射を浴びせかける。

「……際どい格好の女子高生がMINIMIの両手射ちか……」

「牟田口小隊長殿に率いられている時よりはテンションが上がりますよ。」

その様子を見ていた宮崎と班員は苦笑を交わし合うと89式小銃を手立ち上がり、射撃を続ける呂布の近くへ駆け寄る。

「何とも素敵な情景ですよ。貴女は地獄のお姫様といった所ですか」

？」

宮崎の言葉を受けた呂布は射撃を続けながら凄絶な微笑と共に言葉を返す。

「ならば貴方達はケルベロスかしら？地獄のお姫様のお供には相応しいわよ。」

呂布と宮崎が言葉を交わす間に班員が路上に転がる89式小銃と機関拳銃、MINIMIの予備弾倉を回収する。

「落ちていた銃器の回収終わりました。」報告を受けた宮崎は呂布に向けて声をかける。

「御協力感謝致します。」

「別にどうって事無いわよ…早く小隊の所に行って最初のラインに部隊を下げさせなさい、あたしも弾が切れたらすぐに戻るから…」

「了…」

宮崎は短く答えると班員と共に敬礼しながら走り去って行く。

呂布は近寄るゾンビにたいしてMINIMIの銃火を浴びせかけて二人の後退を援護し、小隊主力に合流した宮崎は直ちに部隊を突撃開始線にまで後退させて行く。

激しく唸りをあげていた呂布のMINIMIだったが遂に弾切れの瞬間が訪れカチリッと言う音が呂布の耳を打つ。

呂布はMINIMIを両肩に吊るすと突撃開始線に向けて駆け出す。宮崎が第4小隊を突撃開始線まで後退させて射撃態勢を整えさせていると呂布が到着し息を乱しながら近付いて来た。

「流石にしんどいわね。」

呂布の言葉を受けた宮崎は微笑を浮かべながら頷いたが直ぐに表情を引き締めると口を開いた。

「攻撃を開始します。」

「OK、コイツに弾の補充してくれる？」

「機関銃手！」

呂布の言葉を受けて宮崎の近くにいた小銃班長の一人が号令を下すとMINIMIを装備する自衛官が呂布のもとに駆け寄ると空にな

った箱弾倉を取り外し新しい弾倉と交換し、コッキングレバーを操作し初弾を薬室へと送り込む。

「サンキュー」呂布の言葉を受けた機関銃手は微笑と共に頷くと自分が所属する班へと戻りMINIMIの銃口をゾンビへと向ける。呂布も2丁のMINIMIをゾンビの群れへと指向すると間髪入れずに宮崎の号令がレシーバーに届く。

「攻撃開始!!」

刹那第4小隊26名プラス1名が構えた銃口からマズルフラッシュの閃きが迸り曳光弾の真紅の軌跡が濁流となってゾンビの群れへと吸い込まれていった。

ゴジラ・コマンド

長曽我部は第4小隊が後退を完了したのを確認すると羽島達を後退させ改めてゾンビへの攻撃を実施させた。

迫撃砲小隊が激しい砲撃を浴びせかけ展開した隊員達が激しい弾幕射撃を浴びせてゾンビを射ち倒して行く。

上空には長曽我部達を乗せて来た2機のUH 60JAが展開し暗視スコープを装着したキャリバー50による機銃掃射を実施しゾンビを薙ぎ倒して行く。

封鎖ラインの前に夥しい数のゾンビが倒れて行くがゾンビの群れは途切れる事無く続き接近して来る。

「雅、薫、グレネード及びバーネットの残弾数知らせ!」

「グレネード弾残弾12!」

「バーネット、残り弾倉3」

長曽我部が二人の報告に頷くと校倉から報告が入る。

「小隊からです迫撃砲弾の消費を押さえるため発射速度を押さえるそうです。」

「やむを得んな...」

長曽我部は短く応じながら無線機を手に取ると大隊本部へと通信を送り出した。

大隊本部

長曽我部からの報告を受けた無線手は切迫した表情を浮かべながら地獄谷に向けて報告を送る。

「習志野2より通信です。第4小隊長他1名がゾンビの為に死亡！現在ゴジラコマンドの長曽我部一尉が臨時に指揮をとりゾンビと交戦中ですが弾薬不足の危険があるとの事です！！」

通信手からの報告を受けた地獄谷は傍らに控える情報小隊（偵察小隊）長の大河喜十郎三尉に向けて口を開く。

「大河！情報小隊と予備弾薬を持って習志野2の援護に向かえ！！」
「了！」

大河が叩きつけるように応じながら行動しようとした時、別の無線手が新たな情報をもたらす。

「下志津から応援が接近中です！間もなく到着します！」

「…高射学校だと？」

訝しげな表情を浮かべた地獄谷だったが続いて告げられた編成を聞いた瞬間大河に向けて新たな命令を下す。

「大河、下志津からの部隊が到着次第一部を率いて習志野2に前身せよ！」

地獄谷は大河が敬礼するのに頷きながら無線手に向けて言葉を発する。

「習志野2に通信、増援を送ると伝える！」

地獄谷の言葉を受けた無線手は無線機に向き直ると習志野2に向けて地獄谷の言葉を伝えた。

火消し部隊（前書き）

残酷描写もありますのでお気をつけ下さい。

火消し部隊

大隊本部からの通信を受けた長曽我部は現在地の保持を命令し、部隊は激しい銃撃をゾンビに浴びせ続ける。

「現在地の保持はいいけどその増援とやらは当てになるんでしょうね。」

MINIMIの射撃を続けながら呂布が呟くと宮崎が89式小銃の射撃を続けつつ応じる。

「牟田口小隊長殿と違って長曽我部さんも大隊長も状況判断は出来る人ですからね。何とかなるでしょう。」

「それを願うわ……」

呂布はそう呟きながら両脇に抱えたMINIMIをゾンビの群れへ浴びせかけていたがカチリツと言う音がしてMINIMIの残弾が再び零となってしまふ。

舌打ちしながら機関拳銃に手を伸ばそうとした呂布の眼前に先程銃器を回収していた指揮班員が回収した89式小銃と自分の予備弾倉2つを差し出して来た。

「助かるわ。」

呂布が微笑と共に89式小銃を受け取りつつブレザーのポケットに予備弾倉を挟じ込むと宮崎が自分の予備弾倉1つを渡しつつ口を開く。

「コッキングレバーの位置は右側の出っ張りになります。セレクトーハンドルのアタレは機関拳銃のアタレと同じで3はバースト射撃、弾薬消費を抑える為にタカ3で射撃する事をお薦めします。」

「OK」

呂布は呟きながら89式小銃のコッキングレバーを操作し銃弾を薬室へと装填するとセレクトーハンドルのタに合わせ、手近なゾンビに照準を合わせながら引き金を引く。

軽い銃声が響き反動を受けた呂布の上半体が微かに揺れる中、標的と

なったゾンビの頭部を5・56ミリNATO弾が穿ち抜き永遠の眠りについた骸が静かに崩れ落ちた。

「惚れ惚れしますねえ、入隊希望を出してみても如何です？」

「……考えておくわ」

宮崎の賞賛を受けた呂布は微笑を浮かべながら応じると89式小銃の射撃を続ける。

弾倉に残っていた弾丸を射ち尽くした呂布が弾倉止めのボタンを押し空弾倉を地面に落とした時、射撃の音に混じって重々しいエンジン音が響いて来た。

「何このエンジン音、車にしては重厚過ぎない？」

予備弾倉を装填しながら呂布が呟くとエンジン音を耳にした宮崎が怪訝そうな表情を浮かべつつ口を開く。

「ZFエンジン？　と言う事だ…何故戦車のエンジン音が？　戦車の増援が来るなんて聞いてないぞ…」

宮崎の呟きに答えるようにディーゼルエンジン独特の重々しく腹に響く轟音とキャタピラ音を轟かせながら2両の大型装甲車輛が姿を表した。

箱形のシャーシとキャタピラという姿は一見すると陸上自衛隊の主力（数的）戦車である74式戦車を彷彿とさせるが、砲塔部分にはヴィッカーズ社製105ミリ戦車砲L7を搭載した特徴的な亀甲型砲塔ではなく、両脇に長大な砲身が目を引く機関砲が装備された傾斜平面を組み合わせた巨大な箱形砲塔が装備され異彩を放っている。

「ガンタンクだ…」

指揮班員が思わず呟くのを目にした呂布が怪訝そうな表情を浮かべると宮崎が射撃を再開しながら口を開いた。

「87式自走高射機関砲、戦車部隊に随伴して戦車部隊を航空脅威から防護する事を目的に開発された車輛です。一般広報用愛称はスカイシューターですが自衛隊内ではガンタンクやハ工叩きと読んできます。殆どの車輛は北海道に集中配備されていますが下志津の高射特科教導隊が1個中隊保有していた筈なのでそれを引っ張り出して

来たみたいですね。」

宮崎が説明している間に砲塔に龍の頭がマーキングされた87式自走高射機関砲2両は封鎖ラインの背後で停車し装備されている2門の35ミリ機関砲KDAが獲物を狙う蛇のようにゾンビの群れに指向する。

光学射撃照準システムを使用した射撃手がゾンビの群れを捕捉した事を車長に伝えたと車長が攻撃開始を告げ、それを受けた射撃手が射撃を開始する。

その瞬間砲口から35ミリ機関砲弾が濁流となって迸りゾンビの群れを薙ぎ払う。

牛乳瓶程もある35ミリ機関砲弾はゾンビの身体を容赦無く打ち砕き頭部どころか肩まで吹き飛ばされたゾンビの骸が地面に次々に叩きつけられる。封鎖ラインに接近していたゾンビの群れは87式自走高射機関砲が放つ灼熱の火線に捉えられ、瞬く間にその数を減らして行く。

「えげつないわね」

呂布が圧倒的な火力を発揮している87式自走高射機関砲を苦笑混じりに見詰めているとその後方から迷彩塗装された2台の3・1/2トン(3トン半)トラックが接近してくるのが確認された。

「今度は一体何を出す気よ」

呂布が呟く中2台のトラックは速度を緩めながら封鎖ラインの背後に停車した。

「何だあのトラック？」

射撃の合間に後方を確認した宮崎が訝しげな表情を浮かべながら呟きをもらす。

2台のトラックの荷台は通常の幌では無く三枚の薄い鉄板で覆われており、荷台の中央では座席に座った三尉が素早く準備を整えていた。

「OK！射撃態勢移行！」

三尉の言葉を受けた隊員達が三方を囲む薄い鉄板のストッパーを外すと半長靴を使って鉄板を倒して視界を開かせる。

「オオツいる、いる」

眼前にせまるゾンビを見据えた三尉の口から好戦的な声がもれだす。ブッシュハットの下から覗くツインテールの黒髪と涼しげな青水晶の瞳と眼鏡が印象的な美女、舞風真利菜三尉は凄みのある微笑を浮かべながら口を開く。

「メーベルワーゲン、戦闘開始！」

その言葉と共に真利菜は足先に力を入れると発射ペダルを踏み込んだ。

刹那荷台中央に設置された銃塔の左右に2基づつ合計4基装着されたキャリバー50からシャワーのような銃火が迸り出ると十体近いゾンビが蜂の巣のようにさせられ薙ぎ倒される。

「よし、効果抜群……」

真利菜は呟きながら荷台に設置されたM45四連装対空機銃座「ミート・チョッパ―」を操りながらゾンビに向けて豪雨のような弾幕射撃を浴びせかけて行く。

もう1台のトラックもM45による射撃を開始し濁流のような弾幕射撃がゾンビの群れを呑み込み切り刻んで行く。

「本気でえげつないわね……」

呂布が苦笑と共に呟きながら89式小銃を構え、射ちもらしたゾンビの頭部を射ち抜くと宮崎は同意するように頷きながら言葉を返す。
「まあ、あんな数のゾンビとまともにやり合えばこっちだって無事ではすみませんね。」

「そりゃ、そうね。取敢えず射ちもらしたゾンビを叩きましょう。」
「了」

呂布と第4小隊が87式自走高射機関砲とM45が射ちもらしたゾンビへの攻撃を開始した頃ゾンビの群れが残り少なくなっている事が上空のUH60JAから長曽我部の元へ伝えられ、増援として派遣された情報小隊から弾薬の補充が行われる。長曽我部は補給を受けた迫撃砲小隊及び増援の高射特科部隊に火力支援を行わせつつ前線部隊に射ちもらしたゾンビの掃討を実施させ残るゾンビの集団

を瞬く間に殲滅して行く。

最後のゾンビが薫の放ったバレットによって頭部を粉碎され地面に崩れ落ちると激しく轟いていた銃声と爆発音が鳴り止み夥しい数のゾンビの骸が部隊の前に折り重なっていた。

臨時徴収されたブルトーザーがゾンビの骸を片付ける中、側道封鎖部隊は第7中隊から派遣された第2小隊と大隊本部の情報小隊に任務を引き継ぎ、増援の高射特科部隊と共に大隊本部へと帰投して行った。

生還（前書き）

これからも宜しくお願いします。

生還

大隊本部

大隊本部に帰投した側道封鎖部隊と高射特科部隊は予備戦力として待機するように命じられ、ゴジラ・コマンドは習志野駐屯地に帰投する事となった。

その事を長曽我部から伝えられた呂布は大きく伸びをしながら安堵の呟きをもらす。

「さっすがにもうクタクタよ」

「お疲れ様です。」

長曽我部は労いの言葉と共にスポーツドリンクの詰まったペットボトルを差し出し呂布は片手を掲げながらそれを受け取ると喉を鳴らしながら甘い液体を飲み込むと大きく息をついた。

「身体に染み込むわね」

呂布がそう言いながらペットボトルを飲み干していると宮崎に率いられた第4小隊の一同がゴジラ・コマンドの元へと近付いて来た。

宮崎は小隊を三列の横隊に並ばせると長曽我部に向けて敬礼しながら口を開いた。

「呂布さんに用があり小隊一同で前進して来ました。」

「あたし？」

宮崎の言葉を受けた呂布がキョトンツとした表情を浮かべながら呟くと宮崎は微笑と共に頷き、呂布の傍らの長曽我部が頷きながら口を開く。

「呂布さん、我々はへりに移動します。銃器類はこちらで預りますので用が終わったらへりの所に移動して下さい。」

長曽我部の言葉を受けた呂布はMINIMIや89式小銃をゴジラ・コマンドの面々に預けると第4小隊と向き合いながら口を開いた。

「で、あたしに一体何の用なの？」

呂布の言葉に答える代わりに宮崎は姿勢を正しながら号令を発する。

「気をつけええっ!!」

宮崎の号令を受けた瞬間第4小隊の隊員達が一斉に気をつけの姿勢をとり空挺半長靴の踵が打ち合わされる音が小気味良く響き渡った。
「……!」

その様子を見た呂布は自分も姿勢を正すと真摯な光を瞳に浮かべながら第4小隊の隊員達を見詰め、それを確認した宮崎が更に号令を続ける。

「第4小隊の危機を救って下さった、呂布奉先殿にたああいし、さ
さげええ銃!!」

号令と共に宮崎の背後に整列した第4小隊全員が銃先の根元に添えた右手を一気に自分の顔面に引き上げる。

同時に引き上げられた左手が銃身部の根元を掴み右手が銃先から銃床へと流れるように移動し銃床に添えられる。それと同時に隊員達の顔が呂布に向けられピタリッと停止する。

全員が小銃保持の際の敬礼動作、ささげ銃の体勢をとると同時に宮崎の右手が流れるような動きで敬礼の動作をとり停止する。

「何か照れちゃうわね。」

第4小隊からの敬礼を受けた呂布が少し恥ずかしそうに微笑みながら見よう見まねの敬礼を返す。

呂布の答礼を受けた宮崎は気をつけの体勢に戻りつつ新たな号令を発する。

「たああてええっ、銃!!!」

号令と同時に銃床に添えられていた右手が銃先の根元へと移動した。左手が右手に添えられると同時に小銃が右足の横へと下ろされて行き銃床が地面につくと同時に左手が体側に戻り気をつけの体勢に戻る。

呂布は第4小隊を見渡すと軽くウィンクをしながら口を開く。

「縁があつたらまた会いましょう。」

呂布の言葉を受けた宮崎が微笑を浮かべながら頷くと呂布は手を振りながら第4小隊の前を離れ、長曽我部達の後を追って駆け出した。

宮崎と第4小隊の全員は離れていく呂布の姿を見詰めながら静かに佇み続けていた。

習志野駐屯地上空

第4小隊と別れた呂布はゴジラ・コマンドと共にUH 60JAに乗り込むと特殊作戦群と第1空挺団が駐屯する陸上自衛隊習志野駐屯地へと向かった。

習志野駐屯地上空に到達した長曽我部は呂布に声をかけようとしたが、生還した筈の呂布が浮かない表情で眼下に近づくヘリポートを見詰めているのに気付くと案じるような口調で声をかけた。

「どうかしましたか？」

「…ねえ、長曽我部、今生存者はどれくらいいるの？」

呂布の言葉を受けた長曽我部は一瞬押し黙った後、言い難そうな様子で口を開いた。

「現在の所呂布さんが最初の生存者です。現在特殊作戦群が都内各地の救出捜索にあたっているので生存者の数は増えいくでしょうが…何方か…お捜しですか？」

「…とても大切なヒトよ」

長曽我部の言葉を受けた呂布は短く答えたと近づく駐屯地を静かに見詰め続けていた。

封鎖ライン構築（前書き）

状況説明になります。

封鎖ライン構築

キャンプ座間に司令部を移動させた中央即応集団司令官三橋陸将はゾンビの拡大を防止する為東京周辺域の封鎖を命令する傍ら壊滅的打撃を受けた第1師団の再編に着手する事となった。

千葉方面の都境に第1空挺団の2個大隊が封鎖にあたる中、埼玉県北部及び神奈川方面の都境の封鎖が急務となった。

該当地域に一番近い東部方面隊の戦闘部隊は神奈川方面が第1師団の第31普通科連隊（神奈川県武山駐屯地）であり埼玉方面では第12空中機動旅団所属の第48普通科連隊（群馬県相馬原駐屯地）と中央即応集団隷下の中央即応連隊が存在していた。

常識的には該当部隊を直ちに出勤させて封鎖任務にあたるべき状況であったが第31、第48の両普通科連隊には重大な問題点が存在していた。

両普通科連隊は即応予備自衛官（年間30日の訓練を受け、緊急時に常備自衛官と同様の任務にあたる事を目的とした予備役制度）の運用を目的としたコア部隊であり、通常時は指揮要員等が存在するだけの部隊であり実質的戦闘能力は皆無であると言つてよかった。

無論両連隊とも緊急対処計画QZの作成を受けて召集担当都県の地方協力本部を通じて即応予備自衛官に対して注意喚起を行つてはいたが、この混乱状況では召集作業が捗る筈も無く部隊編成の目処は全くたつていなかった。

その為三橋は緊急措置として座間に駐屯する第1施設団の第4施設群に演習参加の為壊滅を免れた第1普通科連隊第5中隊と第32普通科連隊第3中隊を加えた混成部隊に都境の封鎖を命じると共に中央即応連隊を出勤させ埼玉北部に封鎖ラインを構築させた。

更に第48普通科連隊の編成の遅れを見越していた第12空中機動旅団長栗林忠直陸将は第12ヘリコプター隊を利用して第30普通科連隊（新潟県新発田駐屯地）をピストン輸送で派遣し、埼玉北部

の封鎖ラインを強化させた。

慌ただしく封鎖態勢を整えた陸上自衛隊の各部隊は封鎖網を構築すると休む暇も無く浸透をはかるゾンビの群れとの死闘を繰り広げる事になった。

埼玉北部ではゾンビの大群の襲撃を受け危険な局面に陥りかけたものの東北方面隊が緊急増援として派遣した第2対戦車ヘリコプター隊（青森県八戸駐屯地）のAH 1S「コブラ」対戦車ヘリコプターとドアガンを装備した第12ヘリコプター隊所属ヘリコプターの航空支援により辛うじて封鎖ラインの死守に成功する。

神奈川方面では第4施設群を中核にした混成部隊が装甲ドーザー等の大型重機を駆使した蹂躞戦術と東京湾に進出した海上自衛隊の航空護衛艦「ひゅうが」を発進した第666対戦車ヘリコプター隊のAH 64Dの航空支援を受けてゾンビの襲撃を撃退、残る千葉方面でも第1空挺団が第4対戦車ヘリコプター隊（千葉県木更津駐屯地）のAH 1Sの航空支援と高射教導隊（千葉県下志津駐屯地）が87式自走高射機関砲とM45対空機銃座を搭載した改造トラックで編成した集成高射特科中隊の近接火力支援を受けつつゾンビの襲撃を跳ね返す事に成功した。

取敢えずの封鎖態勢完成の報告を受けた三橋は特殊作戦群及び第1空挺団の1個大隊による救出作業を本格化させる傍ら第12空中機動旅団主力を南下させ埼玉方面の封鎖ラインの強化をはかると共にどうにか編成を終えた第31普通科連隊の1個中隊を神奈川方面の封鎖ラインに投入し既に配置についた2個中隊を組み込む事で第31普通科連隊を戦力化させるよう命令した。

東部方面隊所属各部隊が動く中第1師団に所属する第34普通科連隊（静岡県板妻駐屯地）と第12空中機動旅団所属の第13普通科連隊（長野県松本駐屯地）を中心とした一部の部隊は駐屯地にとどまり出動態勢を整えつつ待機を続けていた。

そのような状況の中、三橋は東京方面の残存部隊の有無を確認すべく救出作業に平行して偵察活動を実施した結果少数の部隊が生き残

り交戦を続けている事が確認された。

残存部隊（前書き）

舞台は再び地獄と化した東京に戻ります。

残存部隊

私立洛陽学園付近

既に生存者の姿は無く、街灯に照らされる路上には、覚束無い足取りで歩みを進めるゾンビの姿がちらほらと散見されるだけであった。生気の欠片も感じられない景色を、双眼鏡で見詰めていた迷彩服姿の女性自衛官、第1偵察隊（第1師団隷下部隊・練馬駐屯地）所属の佐伯夕凧三尉は、首を振りながら無線機のレシーバーを取ると、口を開いた。

「練馬1より練馬2、駄目ね、生存者の姿は無し、そちらの様子はどうか？送レ」

「練馬2より練馬1、こちらの状況も似たようなものです。路上も事故車が多く、移動には困難が予想されます。送レ」

「練馬1了、こちらは事故車の数が少ない為、移動には余り支障をきたさないと思われる。前進はこちらにて実施する、練馬2はこちらに前進せよ。送レ」

「練馬2了、ただちに前進します。送レ」

「練馬1了、終ワリ」

夕凧は更新を終えると無線機を車内通話に切り替えながら口を開いた。

「柊陸士長、聞いた通りよ。練馬2が先頭に行くからそれに追従して頂戴、お願いね。」

「は、はい！」

夕凧の言葉を受け、操縦席に座る柊玖美陸士長が緊張した声で応じる。

玖美の緊張した声を耳にした夕凧は眉を潜めさせると、無理も無い…と思いながら、自分達が乗り込む車輛を見詰めた。

6輪式のコンバットタイヤに傾斜平面を組み合わせて構成されたシ

ヤーシ、細長く突き出た機関砲の砲身が印象的な砲塔を持つ装甲戦闘車輛、87式偵察警戒車は夕凧の視線を受け、地獄と化した街の中に停止している。

機甲科（戦車・偵察）出身の夕凧や砲手として夕凧と共に砲塔内にいる第1偵察隊所属の若林美鈴三曹にとつては見慣れた小型偵察装甲車輛である本車も本来第1後方支援連隊（第1師団隷下部隊・練馬駐屯地）に所属する玖美にとつて操縦を負担に感じてしまうであろう事は想像に難く無い。いくら大型免許で運転出来るとは言え、

87式偵察警戒車はれっきとした装甲車輛なのだ。

（まあ、柊に限った事では無いんでしょうけど…）

夕凧は何とも言えない表情を浮かべると自分が車長を務める87式偵察警戒車のクルー達の顔を思い浮かべた。

ゾンビに飲み込まれた練馬駐屯地から脱出する際、正規の偵察隊員達がゾンビに噛まれてしまった為放置されていた87式偵察警戒車を見つけた夕凧は、共に脱出していた美鈴や手近な所にいた第1後方支援連隊の隊員による俄仕立てのクルーを編成し、脱出を敢行したのだ。

夕凧と美鈴、玖美の三人に加えて玖美の同期生である如月楓陸士長、更に二人の後輩である梓萌一士の五人を乗せた87式偵察警戒車は阿鼻叫喚の世界と化した駐屯地から脱出すると、共に脱出を敢行した正規クルーの乗り込んだ87式偵察警戒車、練馬2と行動を共にして現在に到っている。

道中見掛けたのはゾンビや自暴自棄となり暴徒化した生存者ばかりであり、夕凧達は喧騒と混乱をすり抜けながら都内有数の規模を誇る私立高校、洛陽学園の近くにまで移動して来たのだ。

「佐伯三尉…」

「どうしたの柊？」

夕凧が不安げな声をあげた玖美に対して、穏やかな声色で応じると、玖美が困り切った様子で言葉を続ける。

「燃料タンクのメーターがEに近付いています。どこかで補給しな

いと…」

玖美の声を受けた夕凧が顔をしかめさせながら思案にくなっていると後方からディーゼル・エンジンの音を響かせながらも一台の87式偵察警戒車が夕凧達の近くに移動して来ると一旦停止した。

「練馬1こちら練馬2、到着しました。一気に突っ走りましょう。送レ」

練馬2からの連絡を受けた夕凧は無線機を操作して返答と質問を送る。

「練馬2こちら練馬1、了解した、練馬1は燃料が不足気味なり、そちらの状況はどうか？送レ」

「練馬2、こちらと同じようなものです。送レ」

「練馬1了、前進中はゾンビの少ないガソリンスタンドも探して頂戴、この状況じゃ燃料切れは即ゲームオーバーよ。送レ」

「練馬2了、これよりぜんし…ゾンビに新たな動きが生じています！送レ」

練馬2からの報告を受けた夕凧が前方に視線を移すとそれまでフラフラと覚束無い足取りで周囲を彷徨いていたゾンビが一斉に同じ方向へと向かい歩みを進めているのが確認された。

夕凧は何事が生じているのかを確かめる為に、双眼鏡を構えたと、ゾンビ達の向かう先へと視線を送った。

碧の姫（前書き）

陳宮さん漸く登場です。

碧の姫

ゾンビ達の向かう先では、洛陽学園の制服に身を包んだ少女が、外灯の光の下ゾンビを相手に凄絶な舞いを見せていた。

オレンジ色のショートヘアと煌めくエメラルド・グリーンちんきゅうぐわいの瞳が人目を惹く美しい少女、洛陽学園2年生の陳宮公台は掴みかかろうとするゾンビの腕を、軽やかなフットワークで掻い潜りながら、ゾンビの足下に身体を沈みこませながら右足でゾンビに足を強かに打ち据える。

バランスを崩したゾンビが路上に倒れ込むのを見た陳宮は、素早く立ち上がりながら、もがくゾンビの頭部に蹴りを喰らわせとどめをさし、別のゾンビ目掛けて跳躍する。

外灯の光の下、陳宮のしなやかな肢体が軽やかに浮かび上がると、次の瞬間にはゾンビの頭部目掛けて鮮やかな跳び蹴りが放たれ、爪先がゾンビの頭部に叩き込まれ、頭蓋を穿たれたゾンビが、アスファルトの上に崩れ落ちる。

着地した陳宮に新たなゾンビが近付くと、土気色をした腕が伸びレツドブラウンのブレザーに伸びる。

指先がブレザーを掴もうとした刹那、陳宮の両手がシャツの袖口を掴みゾンビの腕を後方に反らすと同時に、陳宮は背中からアスファルトに倒れ込み、反動を利用しながらゾンビの身体を地面に落としつつ片足を伸ばしてゾンビの腹部を捉え見事な巴投げを見舞う。浮かび上がったゾンビの身体がアスファルトに叩きつけられ、頭蓋を砕かれたゾンビが再び物言わぬ骸に帰す中、陳宮は素早く体勢を建て直しながら、近づくゾンビの集団から距離を取った。

「…全く、やってくれるわね…」

夕風は感嘆の呟きをもらしながら、傍らに停止する練馬2に向けて通信を送る。

「練馬1、確認したわ、最近の女子高生は空挺団並ね。送レ」

「練馬2、全くです、…突っ込みますか？送レ」

練馬2からの言葉を受けた夕凧は、微笑を浮かべながら返答を返す。

「練馬1、女子高生とゾンビ、どっちが好き？送レ」

「練馬2、間違い無く女子高生です。送レ」

「練馬1了、収容は私達が行うわ、…と言うより収容くらいしか出来ないわ、練馬2はただちに進発して、練馬1は速やかに追従するわ。質問は？送レ」

「練馬2了、質問は無し、事後の行動にかかります。終ワリ」

通信を終えた夕凧はモードを車内通信に切り替えると素早く命令を伝える。

「前方に生存者一名あり、これより練馬2と共に救出活動に移るわ、柙は練馬2が進発次第ただちに追従、美鈴は連装（機銃）の射撃態勢を維持しつつ待機、如月は後部偵察員席に移動、命令あり次第柙と共に後部ドアを開き、生存者を収容する。質問は？」

「…無し」

全員の返答を受けた夕凧は小さく頷きながら、言葉続ける。

「ありがとう。如月、後部偵察員席に移動して…」

「ハイッ！佐伯三尉、…よかったら、あたし達も名前で読んで下さい。」

楓の言葉を受けた夕凧は笑い声をあげながら言葉を返す。

「そうね、私達はチームなのよね、分かったわ、楓、行きなさい。」

「ハイッ！」

「玖美、エンジン始動！」

「エンジン始動！」

復唱しながら玖美がエンジンを始動すると駆動音と共にいすゞ製10PB水冷ディーゼルエンジンが唸りを上げアイドリング状態になる。

「如月三尉、楓さんが到着しました。」

後部偵察員席の萌からの報告を受けた夕凧が待機を命じると無線機に練馬2からの通信がもたらされた。

「練馬1こちら練馬2発進準備完了、生存者の付近に到着した後には機銃とカール君で前方のゾンビを掃討します。後方警戒及び生存者の収容を行って下さい。送レ」

「練馬2こちら練馬1、了解した。ただちに進発せよ。送レ」

「練馬2了、終ワリ」

通信を終えると同時に練馬2がエンジン出力を上昇させながら前進を開始する。

それを確認した夕凧は89式小銃（折曲銃床式）を取り出し銃床をセットしながら号令を下す。

「美鈴、砲塔旋回、6時の方向。」

夕凧の命令を受け、微かなモーター音と共に砲塔が動き出し、搭載されたエリコン社製25ミリKBA機関砲の砲身が後方を指向する。夕凧は自分の身体を車体前部の方向に向けながら操縦席の玖美に命令を下す。

「玖美、前進開始！」

「前進開始！」

夕凧の号令を受けた玖美は復唱と共にアクセルを踏み、87式偵察警戒車は滑るように前進を開始した。

救出活動（前書き）

救出作戦が開始されます。

救出活動

陳宮が、ゾンビの群れから距離を取りながら逃走ルートを確認していると、後方からエンジン音が発生し、急速に自分の所に近付いて来るのが感じられた。

「…何、この音？」

怪訝な面持ちで呟いた陳宮が後方に視線を向けると迷彩塗装を施された87式偵察警戒車（練馬2）がゾンビを撥ね飛ばしながらかなりのスピードで接近して来るのが視界に飛び込んで来た。

「自衛隊！？」

陳宮が驚きの声をあげると87式偵察警戒車は陳宮の近くに停車し、砲塔から身を乗り出した車長の斉藤一曹が拡声器（避難民誘導の為事前に搭載されていた物）を使い呼び掛けを行う。

「陸上自衛隊です。救出にまいりました。後方から同じ車輛が来るので、それに乗り込んで下さい。我々はゾンビに対する攻撃を実施します！」

陳宮は斉藤の言葉に頷くと前方を指差し道路脇に存在するファミレスを示した。

斉藤が陳宮の指差した方向をみるとファミレスの出入口からゾンビが次々に姿を現しているのが確認された。

「情報感謝します！攻撃を実施するのでその場から離れないで下さい！」

斉藤は陳宮が頷くのを確認すると車内通信で命令を下す。

「中村は連装にて道路上のゾンビを掃射！佐藤と梅本はカール君で前方200のファミレスを破壊しろ！小林は前方監視！行動開始！」
斉藤の命令を受けた砲主の中村三曹は、照準機を覗き込みながら射撃装置の切り替えスイッチを操作し、25ミリ機関砲の傍らに同軸装備された74式車載7・62ミリ機銃の射撃態勢を整える。

その間に前部偵察員席の梅本陸士長が後部偵察員に到着すると、収

納スペースからFFV社製84ミリ無反動砲、カール・グスタフ（通称カール君）用の高性能榴弾を取り出し、後部偵察員席の佐藤三曹が収納スペースからカール・グスタフ本体を取り出すと、後部ドアを開き、梅本と共に路上に降り立ち87式偵察警戒車の傍らに移動する。

それを確認した斉藤はゾンビの群れを見渡しながら命令を下す。

「砲手、連装！前方200ゾンビの群れ！テエッ！」

「発射！」

斉藤の命令を受けた中村が復唱と共に機銃の発射ボタンを操作すると、74式車載機関銃が激しく唸り、銃口からマズル・フラッシュの閃光と共に曳光弾の真紅の火線が迸り、7・62ミリNATO弾がゾンビの群れへと降り注ぎゾンビを次々に薙ぎ払う。

87式偵察警戒車が射撃を開始したのを確認した梅本は佐藤の後方から高性能榴弾をカール・グスタフに装填し、佐藤はファミレスの入口付近に照準を合わせながらカール・グスタフの筒先を向ける。

「耳を押さえて下さい。」

それを確認した斉藤は陳宮に声をかけ、陳宮はその言葉に従い、両手で自分の耳を押さえた。

それを見た斉藤が手でOKサインを送ると梅本は頷きながら後方に視線を転じ、安全を確認すると佐藤の肩を強めに叩き、佐藤はトリガーを静かに引き絞った。

予想外に軽めの音と共に佐藤達の後方が灼熱の爆風で撫でられ、発射された高性能榴弾がファミレスの入口へと叩き込まれる。

刹那、凄まじい爆発が発生すると室内のゾンビごとファミレスが吹き飛ばされ爆風を浴びた路上のゾンビ多数がアスファルトの上に叩きつけられる。

激しい爆発に陳宮が目を閉じると爆風の余波が陳宮の所にまで到達し、ミニスカートが爆風に受けヒラヒラとはためいた。

衝撃が収まり、陳宮が閉じていた瞳を開けると、吹き飛ばされたファミレスから爆煙が立ち上っているのが確認された。

「…凄い威力…」

陳宮が思わず眩きをもらしていると後方でブレーキ音が生じ振り返った陳宮の視界に砲塔を後ろに向けた87式警戒車（練馬1）が停車している姿が飛び込んで来た。

「あれに乗って下さい！急いで！」

斉藤の言葉を受けた陳宮は小さく頷くと後方の87式偵察警戒車目指して駆け出して行った。

練馬1

陳宮が近付いてくるのを確認した夕風は、89式小銃のセレクターレバーを3の位置へと合わせながら車内通信でクルー達に命令を下す。

「楓、萌、後部ドア開放！美鈴、連装にてゾンビを掃射して！急いで！」

「ハイツ！！！」

夕風の命令を受けた楓と萌は返事をしながら後部ドアを開放すると64式小銃を手に地面へと降り立った。

「砲手、連装！前方150ゾンビ！テエツ！！！」

「発射！」

美鈴が復唱と共に74式車載機関銃の射撃を開始し、7・62ミリNATO弾がゾンビを次々に薙ぎ倒す。

陳宮が射撃を開始した87式偵察警戒車に近付くと、萌が手を振りながら陳宮に合図を送り、こちらに来るようにと手招きを行い、陳宮は萌の傍らへと駆け寄った。

「ありがとうございます。助かりました。」

「よかった…こっちに来て、早く逃げましょう。」

萌が嬉しそうな声をあげながら陳宮を後部ドアに案内すると、楓が64式小銃を構えつつセミオートでの射撃を近づくゾンビに浴びせていた。

「楓先輩！生存者の方です！」

萌の言葉を受けた楓は、頷きながら射撃を中止するとセクターレバーをアに戻しつつ車内に入ると、前部偵察員席に駆け込む。

続いて陳宮が車内に入り込み、最後に萌が車内に飛び込むと後部ドアを閉ざしながら車内無線のレシーバーを掴むと報告を送る。

「萌です！生存者収容完了しました！」

砲塔上から89式小銃のバースト射撃を行っていた夕風は無線を切り替えながら前方の練馬1に通信を送る。

「練馬2こちら練馬1、生存者収容完了、直ちに離脱して頂戴。送レ」

「練馬1こちら練馬2了解しました。直ちに離脱します。送レ」

「練馬1了、終ワリ」

通信を終えた夕風は練馬2が佐藤達を収容し、動き出すのを確認しながら車内通信で命令を下す。

「美鈴、射撃止め、玖美、前進！」

夕風の命令と同時に87式偵察警戒車は射撃を停止すると同時に前進を開始し、先発した練馬2と共に地獄の街から離脱して行った。

給油作業（前書き）

そのまんまの内容です。

給油作業

陳宮が離脱していく87式偵察警戒車の中で、安堵の溜め息をもらしている、後部偵察員席に座る萌が無線機のレシーバーを手に陳宮に話しかけて来た。

「ごめん、ちょっとコレ着けてくれない？車長が話したいって言うてるから…」

「あつ、はい…」

陳宮が、そう返答しながら萌からレシーバーを受け取り、自分の耳に押し当てるとレシーバーから夕風の穏やかな声が流れて来た。

「お疲れ様…」

「いいえ、ありがとうございます。助かりました。」

陳宮の返答を受けた夕風は、軽い笑い声をあげつつ、更に言葉を重ねる。

「私は陸上自衛隊、第1師団、第1偵察隊所属の佐伯夕風三尉よ、クルーは…」

夕風の言葉を引き継ぎ、クルー達が自己紹介を続ける。

「佐伯三尉と同じく第1偵察隊所属の若林美鈴三曹です。」

「あたしは第1師団、第1後方支援連隊、補給隊、需品補給小隊所属の柊玖美陸士長よ。」

「私は玖美と同じ需品補給小隊所属の如月楓陸士長、貴女にレシーバーを渡したのが、私達の後輩の梓萌一士よ。」

陳宮が後部偵察員席の萌に視線を送ると、萌は笑顔を浮かべながら頷き、それを見た陳宮も笑顔を浮かべながら萌に頷きを返しつつ、口を開いた。

「洛陽学園二年生の陳宮公台と言います。宜しくお願いします。」

「こちらこそ」

夕風が陳宮の言葉に対して笑顔を浮かべながら応じていると、前方を進む練馬2からの通信がもたらされる。

「練馬2より練馬1、前方200にセルフ式ガソリンスタンドあり、現在の所ゾンビの姿は確認されず。送レ」

「練馬1より練馬2、了解した、燃料補給を実施する。送レ」

「練馬2了、終ワリ」

通信を終えた夕風は、車内通信にて新たな命令をクルー達に伝えた。

「練馬2よりガソリンスタンドを発見したとの連絡が入ったわ。今の所ゾンビの姿は確認されていないみたい、燃料を補給しておくわ。楓と萌は燃料補給をお願い。」

「任せて下さい。」

「補給作業はお手の物です。」

楓と陳宮からレシーバーを返された萌が答えるのと同時に、夕風の視界にもガソリンスタンドの所在を示す看板の姿が、確認されるようになった。

それから幾らも時間のたため間に2台の87式偵察警戒車は無人となったセルフ式ガソリンスタンドへと進入すると微かなブレーキ音と共に停車した。

「玖美、エンジン停止、楓と萌は下車して速やかに補給と警戒にあたって頂戴。」

夕風の言葉を受けた玖美がエンジンを停止すると同時に萌が後部ドアを開くと地面に降り立つ。

それを見た夕風は自分の財布を取り出すと萌に向けて放り投げながら言葉をかける。

「諭吉さんを数枚、放り込んで頂戴、自衛隊の装甲車輛は大食いだから。」

「了解です。」

財布を受け取った萌が笑顔で答えると萌に続いて陳宮と楓が車外に出て来た。

「陳宮さん？」

怪訝そうな面持ちの夕風が声をかけると陳宮は小さく微笑みながら口を開く。

「私も警戒にあたります。」

陳宮の言葉を受けた夕凧は、微笑を浮かべながら頷くと、自分の89式小銃を手にとると弾倉を抜き、薬室に弾丸が装填されていない事を確認すると、89式小銃を陳宮に向けて投げ渡した。

「暴発しちゃ、不味いでしょ？」

陳宮が89式小銃を受け取ったのを確認した夕凧は、悪戯っぽくウインクしながら、先程抜いた弾倉に加えて予備弾倉2本を取り出し、輪ゴムで一纏めにして陳宮へと投げ渡した。

「大丈夫なんですか？こんな事しちゃって？」陳宮が苦笑を浮かべながら一纏めにされた弾倉を受け取り、その内2つをブレイザーのポケットへと挟み込んでみると、夕凧は肩を竦めながら言葉を返す。

「さっきのゾンビとの戦闘見せてもらったわ、今、練馬2も含めたこの部隊で一番戦闘能力の高いのは陳宮ちゃんだもの……」

陳宮が夕凧の言葉を聞きながら、残る弾倉を89式小銃の弾倉受けに装着すると、その音を聞いた夕凧は周囲を見渡しながら言葉を重ねる。

「銃の右側に出っ張りがあるでしょ、そこがコッキング・レバーだから弾倉を入れたらそこを思いっきり引いて弾丸を薬室に装填するの。」

夕凧の言葉に従い陳宮がコッキング・レバーを操作すると小気味良い金属音と共に薬室に5・56ミリNATO弾が装填される。

「銃の横の小さなレバーはセレクター・レバーでアタレと3つて本体に書かれてるでしょ？」

陳宮は89式小銃を確認し、夕凧の言葉が間違い無い事を確認すると首を傾げながら口を開く。

「コレって、どういう意味合いなんですか？」

「アは安全装置、ここにレバーがある限り、弾は発射されない、タはセミオート射撃モード、引金を引く度に弾が1発ずつ発射されるわ、レはフルオート射撃モード、引き金を引いてれば、弾倉の弾が無くなるまで射撃を続けてくれるわ。」

陳宮は夕凧の言葉を受けると眉を潜めながら89式小銃のセレクター・レバーを見詰めつつ言葉をもらす。

「気をつけないとすぐに弾切れになっちゃいますね。夕で射撃した方が良さそうですね。」

陳宮の言葉を受けた夕凧は、感心したように頷きつつ、言葉が続ける。

「若しくは3の部分ね、3はバースト射撃モードの事で引き金を一度引く度に弾が3発つつ射撃するモードね。まあ、こんな所で派手なドンパチする訳にはいかなから、ゾンビが接近する迄は、セレクター・レバーはアの所にしておいてね。」

「分かりました。」

陳宮は夕凧の言葉に返答しながら、セレクター・レバーがアの位置にある事を確認すると、87式偵察警戒車の傍らに立つと89式小銃を構えながら周囲に鋭い視線を送り、警戒態勢に入る。

その間に萌はセルフ式の給油機を操作すると給油口に給油ホースを差し込み、燃料タンクにディーゼル・エンジン用の軽油を流し込んで行く。

給油中の夕凧達の87式偵察警戒車の隣では、斉藤達の乗る87式偵察警戒車が、同様の給油作業を実施しており、給油機の作動する機械音が周囲に響いている。

（まわりが静かだから、こんなに小さな音でも、ゾンビにも気付かれてしまうかもしれない…）

陳宮は懸念と共に周囲に視線を向けていたが、その視線が、ガソリンスタンド脇をはしる道路上に固定される。

街頭に照らしだされるアスファルトの上を、フラフラと覚束無い足取りで進むゾンビが数体、ガソリンスタンドに向けて静かに接近して来るのを確認した陳宮は銃床を片付けしセレクター・レバーに手を添えながら夕凧に声をかける。

「佐伯さん！ゾンビです！まだ数は少ないけど、こっちに向かっていきます！」

陳宮の言葉を受けた夕凧は頷きながら給油作業を進める萌に声をかける。

「萌、作業はどう？」

「もう少しで終わります」

夕凧は萌の答えに頷くと隣の87式偵察警戒車に向けて拡声器で呼び掛ける。

「ゾンビが接近してるわ！作業の進捗状態を報せて！」

「後少しで終了します！」

「了、作業が終了次第ただちにエンジン始動、発進準備を整えて頂戴」

「了！」

夕凧と斉藤が会話を終わると同時に萌が給油ホースを給油口から抜きつつ口を開く。

「佐伯三尉、給油終了しました！」

「OK！お釣は構わないから急いで乗って、総員乗車！安全装置は確実に確認して頂戴！」

夕凧の言葉を受けた三人は、安全装置を確認しながら87式偵察警戒車に駆け寄り、次々に車内へと駆け込む、楓が前部偵察員席に座り、陳宮の後に続いて入って来た萌が後部ドアを閉めると、車内通信で夕凧に報告を行う。

「乗車完了です。」

「玖美！エンジン始動！」

「エンジン始動！」

玖美がエンジンを始動させると、斉藤の指揮する87式偵察警戒車も同じようにエンジンを始動させ、アイドリング音が周囲を満たす。

「練馬1より練馬2、発進準備よいか？送レ」

「練馬2より練馬1、発進準備完了何時でも行けます。送レ」

「練馬1了、ただちに発進せよ。終ワリ」

夕凧が更新を終えると同時に練馬2が前進を開始する。

それを確認した夕凧は操縦席の玖美に発進するよう命令し、夕凧達

の乗る87式偵察警戒車は練馬2と共にガソリンスタンドから発進して行った。

宿営地（前書き）

物凄く今更ですが…この作品はGLであります。

宿营地

給油を終えた夕凧達の87式偵察警戒車は、先行する練馬2と共に事故車の点在する道路をゆつくりとしたスピードで前進し、都内からの離脱を目指していた。

所々に点在する事故車を回避して行かなければならない為に、あまりスピードを上げられず、周囲の警戒も行わなければならない為、かなりの緊張と疲労がクルー達に蓄積されているのが夕凧に感じられていた。

「練馬1より練馬2、どこか安全そうな所を探してそこで休みましょう、脱出以来緊張の連続だし、このままじゃ磨り減ってしまうわ送レ」

「練馬2より練馬1、異存ありません、こちらもかなりへばり気味です。送レ」

「練馬1了、終ワリ」

夕凧が練馬2との交信を終えてから約30分後、緊張を強いられるドライブからの解放を意味する報せが練馬2からもたらされた。

「練馬2より練馬1前方300に公園あり、三方が鉄柵と溝で囲まれており、残る一方には鉄製の柵門があり現在門は閉じられています。公園内にゾンビの姿無し。送レ」

「練馬1より練馬2、そこで休みましょう。柵門の広さはどれくらいなの？送レ」

「練馬2かなり広いですRCV（87式偵察警戒車の自衛隊内での呼び名）が通過可能と思われます。送レ」

「練馬1了、お誂え向きね。出入口を確保して頂戴。送レ」

「練馬2了、終ワリ」

夕凧が通信を終えて視線を前方に向けると鉄柵と柵門で周囲を囲まれた公園が視界に飛び込んで来た。

「全員、今夜は練馬2が発見した公園で休むわよ。玖美、練馬2が

停止したら少し離れた場所で停車して頂戴。」

「はい。」

夕風の指示に玖美が応じていると、公園の出入口付近に到着した練馬2が停車し、佐藤三曹と梅本陸士長の二人が車外に出て、柵門を調べているのが確認された。

「玖美、停車。」

夕風の言葉を受けた玖美は87式偵察警戒車を停止させ、佐藤達が柵門を開けようとしているのを、祈るような気持ちで見詰めていた。

10分後　公園

柵門には南京錠が施されていたが佐藤三曹がピッキングで開ける事に成功し、2台の87式偵察警戒車は公園へと進入すると出入口の近くで停車した。

「皆お疲れ様、今夜はこの公園で休むわ、玖美、楓、萌、陳宮ちゃん、車外に出てひと休みしなさい。私と美鈴で休憩がてらに監視しとくから」

夕風の言葉を受けた四人は、車外に出ると強張っていた身体を解すように動かしながら安堵の表情を浮かべる。

「んー、操縦席に缶詰だったから身体がギシギシいつてるみたい。」

玖美が軽い柔軟体操をしながら呟くと、ヘルメットを脱いだ萌が、首をゆっくりと回しながら労いの言葉をかける。

「お疲れ様です。先輩。」

「ありがと、萌。」

玖美が笑顔を浮かべながら萌の言葉に応じるのを見ていた陳宮に楓が微笑を浮かべつつ声をかけて来た。

「玖美と萌はね、幼馴染みで同じ高校の先輩と後輩なの、萌が自衛隊に入ったのは、玖美が自衛隊に入ったからなのね。そう言えば、新隊員で入隊してきた萌を見た時、玖美は本当にびっくりしてたよね。」

楓の言葉を受けた玖美は、穏やかな笑みを浮かべつつ言葉を続ける。
「そりゃ驚くわよ、あの甘えん坊な萌が自衛隊に入るなんて思わなかったから…」

「ちよつ、それ酷く無いですか？玖美先輩！」

玖美の言葉を受けた萌が抗議の声をあげると、玖美は萌の頭を優しく撫でながら声をかける。

「でも、本当に嬉しかったよ。萌が来てくれて、今だって萌がいてくれるから、あたしは頑張れてるんだよ。」

「先輩」

玖美の言葉を受けた萌が表情をフニヤンツと緩めながら嬉しそうに頷くのを見た楓は、陳宮に目配せしながら二人に声をかける。

「私と陳宮ちゃん少しその辺散歩してくるから」

そう言いながら楓は陳宮を促しながら歩き出す。

「優しいんですね楓さんって…」

「まあ、ね…」

陳宮の言葉を受けた楓は鼻の頭をかきながら、照れ臭そうに頷いた。

「大変だったのよ」萌が自衛隊に入隊したって知ってからの玖美、大丈夫かな？大丈夫だよな？って、しつこいくらい聞いてくるんだから…」

陳宮は楓の言葉に笑顔を浮かべながら頷いたが、次の瞬間には二人の方へと視線を向けながら、静かに口を開く。

「…こんな時に不謹慎と思うけど、私はあの二人が羨ましいです。」

「陳宮ちゃん？」

楓が陳宮に声をかけると陳宮は小さく言葉を続ける。

「あの二人は大切なヒトと一緒にいる事が出来てるから…私は…」

「はい、それ以上言っちゃ駄目」

「えっ!？」

楓は言葉を遮られた陳宮が戸惑いの声をあげるのを無視すると、陳宮の肩を優しく抱き締めながらあやすように声をかける。

「大丈夫、陳宮ちゃんの大変なヒトはきっと無事だよ。陳宮ちゃん

が弱気になっちゃ駄目。」

「そう、ですね。」

陳宮は楓の言葉を受けると微笑を浮かべながら、頷く。

「そうですね、あの方がゾンビなんかにはやられる筈ありません。」

「そうそう、その意気その意気。」

楓は陳宮の言葉に笑顔を浮かべながら頷くと、辺りを見渡しながら口を開いた。

「さてと、そろそろ二人の所に戻ろうか？」

「そうですね。」

陳宮は楓の言葉に頷くと踵を返し、二人で玖美達の元へと戻って行った。

休息（前書き）

そのまんまの内容です。

休息

陳宮達が夕凧の所に戻ると、夕凧は湯気のたつカップを手に砲塔のハッチに身を預けながら、周囲を見渡していた。

「佐伯三尉、どうしたんですそのカップ？」

玖美が怪訝そうな面持ちで問いかけると、夕凧は軽くウィンクしながら言葉を返した。

「RCVの正規のクルーが前もって積み込んでた背囊はいのうから携帯コンロとカップ類を拝借したのよ。アップル・ティーしか無いけど飲む？」

全員が一齐に頷いたのを見た夕凧は、小さく笑いながら頷くと、陳宮達に車体上部に上がってくる様に伝えた。

夕凧の言葉に従い、87式偵察警戒車の上に上がった陳宮達が砲塔に近づくのと夕凧は各自に湯気のたつカップを手渡し、陳宮達は砲塔後部で身を寄せ合うようにしながら湯気をたてる琥珀色の液体を口に含んだ。

飲み込んだ紅茶が絶え間無い緊張に晒されていた身体の隅々にまで染み込み、陳宮達は一斉に小さな溜め息をもらしながら湯気のたつ紅茶をじっくりと味わう。

「美味しい…身体に染み込んでくみたい。」

陳宮は玖美の言葉に頷きながら、もう一度カップを口に含むと温かな紅茶を喉に流し込み、楓や萌も噛み締めるように紅茶を味わう。

陳宮達がゆっくりと紅茶を味わっていると、練馬2から佐藤三曹と梅本陸士長が近付いてくると、砲塔後部にいる陳宮達に声をかけてきた。

「カップ麺を持って来たぞ。熱いから気をつけろよ。」

「あ、ありがとうございます。」

萌は小声で御礼を言いながら佐藤達が運んで来た6個のカップ麺を受け取り、楓がプラスチック製のフォークを受け取り全員に配る。

「そっちは大丈夫なの？」

夕凧がカップ麺の蓋を開けながら問い掛けると、佐藤達は静かに笑いながら言葉を返す。

「カップ麺は多目に背囊に入れてますからね。」

「ご遠慮無く。」

「助かるわ。」

佐藤と梅本は夕凧の言葉に対して敬礼する事で応じると自車へと戻って行った。

夕凧は周囲を見渡ししながらフォークに麺を絡ませながら後方の一団に声をかける。

「食べなさい。監視は私がしているから……」

夕凧の言葉を受けた陳宮達はフォークに絡ませた麺を口に含むとスープの絡んだ麺を啜り込み、ゆっくりと飲み込む。

「美味しい……今まで食べた中で、一番かも……」

萌が溜め息混じりに呟くと皆も頷きながら無言でカップ麺を啜り込んで行き、瞬く間に容器が空になっていった。

カップに残る紅茶を飲み干した陳宮達が小さく溜め息をついていると、夕凧は砲塔内の美鈴からゴミ袋を受け取り楓に差し出しながら声をかけて来た。

「ゴミはここに片してね、皆疲れたでしょう？警戒員一名を残して車内かRCVの車体上部で仮眠を取りなさい。玖美は申し訳無いけど操縦席で寝て頂戴。毛布は後部偵察員席の脇に置かれてる筈だからそれを使つて頂戴。」

「はい」

夕凧の言葉に応じて陳宮達は空になったカップ麺の容器をゴミ袋に入れると、後部偵察員席から毛布を引っ張り出すと全員に二枚づつ配っていった。

「現在時2330、起床は0630警戒員は1時間交代で私、美鈴、玖美、楓、萌のじゅん」

「佐伯さん、私にもお手伝いさせて下さい。」

夕風は陳宮の申し出を受けると微笑を浮かべながら頷くと言葉を続ける。

「陳宮ちゃんには萌の後の警戒にあたってもらわね。0530になつたら私を起こして頂戴。」

「はい。」

陳宮の返答を合図にしたように玖美が立ち上がり、萌から毛布を受け取ると地面へと降り立つ。

「お休みなさい。」

全員に声をかけた玖美は萌に視線を向けると笑顔と共に口を開く。

「お休み、萌」

「お休みなさい、先輩」萌が笑顔と共に答えると玖美は穏やかな表情と共に頷きながら操縦席へと向かって行き、それを見送った楓も毛布を手に立ち上がると、大きく伸びをしながら口を開いた。

「あたしは前部偵察員席で寝とくわ、じゃあね、萌、陳宮ちゃん」

「お休みなさい楓先輩。」

楓の言葉を受けた萌が頷きつつ応じると、陳宮も笑顔を浮かべながら言葉を続ける。

「お休みなさい楓さん、さっきはありがとうございます。」

「気にしない、気にしない、じゃあね二人とも」

二人の言葉を受けた楓が笑顔と共に地面に降りて行き、残された陳宮と萌は顔を見合わせながら微笑を浮かべた。

「あたし達はここで寝ようか？ちよつとゴツゴツしてるけど車内より断然広いし。」

「そうですね。」

陳宮は萌の言葉に頷くと車体に毛布を敷き、萌と共に腰を降ろした。

「ねえ、陳宮ちゃん」

「どうしたんです、萌さん？」

腰を降ろした萌が少し恥ずかしそうに声をかけてきたのに対して、陳宮が怪訝そうな表情を浮かべつつ応じると、萌は恥ずかしそうに笑いながら言葉を続けた。

「ちょっと不安だから、くつついて寝てもいいかな？」

萌の提案を受けた陳宮は一瞬考えた後、微笑を浮かべながら答えを返す。

「はい、…私も少し心細いから」

「ありがとう、陳宮ちゃん。」

萌は陳宮の言葉に嬉しそうに頷くと陳宮に寄り添い、陳宮もそれに応じるように身体を傾けて行く。

ブレザーと迷彩服が重なり合う微かな衣擦れの音を耳にしながら陳宮と萌は身体を車体に横たえ、毛布にくるまる。

「陳宮ちゃん、あったかい。」

「萌さんも凄く温かいです。」

横になった二人はそう言い合つと、恥ずかしそうに笑い合いながら言葉を交わす。

「お休み、陳宮ちゃん…」

「お休みなさい、萌さん…」

口を閉ざした二人は直ぐに睡魔に誘われ、寄り添いながら、静かな寝息をたて始め、それを確認した夕凧は微笑を浮かべながら頷くと周囲の警戒へと戻っていった。

一方その頃練馬2では…

「中村お湯はまだか？」

「も、もう少しです。」

「早くして下さい中村三曹」

「そうだ、早くしろ中村」

「…俺砲手だよな？」

「中村あ、自衛隊のヒエラルキーでは砲手はNo.2かも知れんが、この車内ではお前のヒエラルキーは最下位なんだよ。分かったら早く湯を沸かせ。」

砲手の筈の中村三曹が必死になってお湯を沸かしていた。

起床（前書き）

これからも自分なりのペースで更新を続けていきます（（（^^^；）

起床

0430

警戒を終えた萌が陳宮の所に行くと、陳宮は毛布にくるまり、スヤスヤと安らかな寢息をたてていた。

「…呂布様…」

小さな寢言を呟くあどけない寝顔を見た萌は、小さく微笑を浮かべながら陳宮の身体に手があると、その身体を優しく揺すりながら口を開いた。

「陳宮ちゃん、起きて、交代だよ」

「…ンツ、フ、フアツアツ…」

萌に起こされた陳宮は欠伸をしながら起き上がると、寝惚け眼で萌を見詰めながら口を開いた。

「もえ…さん？フアア…交代ですか？」

「ウン、宜しくね陳宮ちゃん」

萌の言葉を受けた陳宮は傍らに置いていた89式小銃を手に取り、欠伸を噛み殺しながら砲塔へと向かい、ハッチに身を潜らせると背中を砲塔に依託する。

「はい、陳宮ちゃん」

陳宮が用意を整えたのを確認した萌が暗視双眼鏡と熱い紅茶が詰まった魔法瓶を手渡し、陳宮は微笑を浮かべながら受け取ると暗視双眼鏡を首にかけた。

「お疲れ様でした。萌さん。」

陳宮が労いの言葉をかけると萌は微笑と共に頷いたが、寢床に戻らずに眼前の道路へと視線を向けた。

「萌さん？」

陳宮が怪訝そうな面持ちで口を開くと、萌は小さく笑いつつ言葉を返して来た。

「あたしも警戒するよ…」

「…ありがとうございます。」

陳宮から言葉を受けた萌は小さく頷きを返し、二人は周囲の警戒を開始した。

「ねえ、陳宮ちゃん？」

「どうしたんです、萌さん？」周囲に視線を向けながら萌が口を開き、陳宮がそれに対して視線を前方に向けたまま応じると萌は更に言葉を続ける。

「呂布様って誰？」

「…ッッ!？」

萌の質問を受けた陳宮は顔を赤らめながら絶句すると、恥ずかしそうに口を開いた。

「私、何か言っていましたか？」

「ウン、寝言で小さく呂布様…って、その時の陳宮ちゃん、とても幸せそうだったから…」

陳宮は萌の言葉に対して、頬を赤らめながら小さな声で答えた。

「呂布様は、私のとても大切なお方です。」

陳宮が噛み締めるように言葉を返すと萌は微笑を浮かべながら頷くと、暫く躊躇った後に口を開いた。

「陳宮ちゃん…、その呂布様は…その…」

言い難そうに言葉を濁す萌に対して、陳宮は周囲に視線を配りながら静かに、しかし迷う事無く言葉を返す。

「大丈夫です。呂布様は私よりもずっと強いお方です。呂布様がゾンビなんかには敗ける筈ありません。必ずまたお会い出来ます。」

「…ウン、そうだね…」

陳宮の言葉に対して、萌は穏やかな表情と共に言葉を返すと、笑いながら陳宮に向けて囁きかける。

「今度、その呂布様の事紹介してくれる？」

陳宮は萌の言葉を受けると頷きつつ言葉を続ける。

「勿論です。その時は玖美さんも一緒に紹介させて下さいね。」

「…ウン」

陳宮の言葉を受けた萌は恥ずかしそうに俯くと、顔を赤らめながら頷き、二人は口を閉ざすと、周囲の監視を続けた。

1時間の警戒時間中は何事も無く過ぎて行き、陳宮は夕凧へと警戒員を引き継ぐと車体の後部へと移動すると萌と共に毛布に潜り込んで行った。

0630

陳宮から警戒員を引き継いだ夕凧は腕時計を確認すると、後部で横になっている陳宮と萌に声をかけた。

「萌、陳宮ちゃん、起床よ」

陳宮は夕凧の声と同時に起き出すと、傍らで毛布にくるまっている萌の身体を揺さぶりつつ声をかける。

「萌さん、起床時間ですよ。」

「フヘツ?...わ、分かった...」

萌は起き上がると頭を振りながら欠伸を噛み殺すと、迷彩ヘルメットを頭に被りながら傍らに置かれた64式小銃を手に取った。

それを確認した陳宮も小さく頷きながら傍らの89式小銃を手にすると、周囲に視線を送る。

白々と明け始めた周囲は何事も無かったかのように静まりかえっていたが、道路上に放置された事故車の生々しい姿が、この街が地獄である証として道路のあちこちに点在していた。

陳宮達が起きた事を確認した夕凧は車内通信で残る三人を起こすと美鈴に携帯コンロを使ってお湯を沸かすように伝え、萌に声をかけて車内に積まれた背嚢を改めてチェックさせた。

「わっ、袋メシだ...」

萌は弾んだ声をあげると背嚢から戦闘糧食?型、通称袋メシの山菜飯やドライカレー等のパックを取り出して行く。

「萌、袋メシをこっちに持って来て」

夕凧の言葉に応じて萌が袋メシを夕凧に渡すと夕凧はそれを砲塔内の美鈴に渡し温めさせる。

そうしている内に楓が欠伸をしながら後部ドアから姿を現すと、車体上部に向けて声をかけて来た。

「おはようございます佐伯三尉、おはよう萌、陳宮ちゃん」

「おはよう楓」

「おはようございます楓先輩」

「おはようございます楓さん」

それぞれが挨拶を交わす間に玖美も操縦席から姿を現すと同じ様に皆と挨拶を交わす。

一通り挨拶が終了した所で砲塔内の美鈴から温められた袋メシが夕凧に手渡され、夕凧はそれを皆に配って行く。

「自衛隊の人ってこんなご飯を食べてるんですね。」

陳宮が手渡されたドライカレーのパックを珍しげに見詰めつつ呟くと、夕凧が小さく笑いながら口を開いた。

「こういうのを食べるのは演習とか戦闘状況の時だけよ、普段は駐屯地の食堂とかで普通の食事を摂ってるわ。」

「そうなんですか？」

陳宮はそう言いながら見よう見まねで袋メシの上部を切り取り、袋の下をつかみ、ドライカレーを少し押し出すとかじりつく。

「あっ、結構美味しい。」

陳宮が観想をもらすと、山菜飯にかじりついていた楓が笑顔と共に声をかけてきた。

「ドライカレーは袋メシのご飯物では一番人気だよ。」

「そうなんですか……」

陳宮は楓の言葉に頷きながら食事を続け、手渡されたドライカレーと山菜飯のパックをあつという間に平らげてしまう。

食事を終えた陳宮達が空になったパックをゴミ袋に入れると、夕凧は腕時計を確認しながら指示を出す。

「現在時、0648、今後の予定は0715に出発して神奈川方面

の都境を目指すわ。また車内に缶詰になるから今の内に思いつき身体を伸ばしておいた方がいいわよ。」

夕凧の言葉に従って陳宮

達は公園に降り立つと、軽い体操をしたりしながら会話を交して行く。

「へえー呂布様かあ…陳宮ちゃんって奉仕系なんだね」

「ほ、奉仕系って」

「あつ、今変な事想像したでしょ？」

「しし、してません。」

「陳宮ちゃん、真っ赤」

「萌さんまで」

三人の言葉を受けた陳宮が真っ赤になって抗議の声をあげると、三人は笑い声をあげたが次の瞬間に真剣な表情になって言葉を続ける。
「きつと会えるよ」

「うん、絶対に大丈夫」

「絶対生き残って、呂布様に会おうね、陳宮ちゃん…」

「皆さん…ありがとうございます。」

三人の言葉を受けた陳宮が笑顔を浮かべながら、頭を下げ、三人は笑いながら頷きを返す。

「さてと、じゃあそろそろRCVに戻ろうか」

玖美が声をかけ陳宮達が頷いた時、全員の耳に微かなヘリのローター音が聞こえて来た。

「ヘリ!？」

楓は思わず呟きながら顔を上げ周囲を見渡し始め、それに続いて陳宮達も同じ様に周囲に視線を送る。

そうして周囲を見渡していた陳宮達の視線がある一点で固定された。その先ではこちらに接近してくるヘリの機影がはっきりと確認されていた。

偵察飛行（前書き）

少し短めになります。

偵察飛行

東京上空0700

朝を迎えた街は痛々しい姿を見る者に晒していた。

道路上のそこかしこには事故を起こし放置された車が点在し、街中の数ヶ所からは火災の発生を示す黒煙が狼煙のように立ち上っていた。

「滅びを告げる狼煙か…」

陸上自衛隊第4対戦車ヘリコプター隊に所属する千早幸弘二尉は小さく呟きながら操縦桿を操作して愛機、偵察ヘリコプター、OH1を前進させる。

「国破れて山河ありならぬ国破れてゾンビあり、ですか、ゾツとしない展開ですね。」

千早の後部の偵察員席に座る高梨三郎三尉は、千早の言葉に応じながら眼下に広がる滅びの景色に目をやりながら言葉を続ける。

「残存部隊の搜索…一体どれ程生き残っているのか…」

「ゾンビに飲み込まれた駐屯地の主だった部隊は第1、第32の両普通科連隊に加えて第1師団隷下の第1偵察隊、第1後方支援連隊等多数にのぼる、いくらゾンビの拡散が急だったとは言えこの部隊全てが全滅したとは思えん。一部の部隊が窮地を脱したと考えるのは自然な流れだな…」

千早が高梨の言葉に応じると高梨は小さく頷きつつ言葉を続ける。

「ある程度装甲化された車輛を運用する部隊なら可能性はありますね。」

「普通科連隊のLAV（ラブ＝軽装甲機動車）や第1偵察隊のRCVだな、緊急対処計画QZの発動以来、各車輛特に装甲戦闘車輛は即応態勢の為、予め弾薬類を積載しているから、最初の襲撃を乗り切る事が出来ればどうにかなる筈だ。」

言いながら周囲を見渡していた千早の目が前方の一点で固定される。
「高梨、1時の方向を確認しろ」

千早の言葉を受けた高梨が素早くスイッチ類を操作し、メインローターの根本に配置された複合偵察ユニットで指示された方向を確認する。

「確認しました…信号弾です。間違いありません!」

「よし、直ちに前進する。」

高梨が興奮した口調で報告を行うと千早は短く応じながら、エンジンの出力を上昇させる。

三菱製TS1 M 10エンジンが静かに唸り、OH 1は滑らかに加速しながら信号弾が確認された方向に向けて前進を開始した。

練馬1

「どうやら気付いてくれたみたいね」

ヘリの機影が真っ直ぐ近付いてくる事を確認した夕風は、安堵の溜め息をもらしながら信号銃を収納した。

ヘリの機影はどんどん大きさを増して行き、OH 1の姿となって夕風達の前に姿を現した。

87式偵察警戒車の近くに駆け寄った陳宮達がOH 1に向かって大きく手を振るとOH 1はそれに応じるように機体を左右に傾けながら前進して公園の上空をフライパスする。

明るい表情でOH 1を見送った陳宮だったが、その表情が突然、怪訝な物となり、公園の一点に固定される。

「あれ、何でしょう?」

陳宮がその地点を指し示しながら呟き、訝しげな表情を浮かべた楓がその先を見詰めると地面の上に小さな金属製の筒が落ちているのが確認された。

「通信筒!」

楓が慌てて筒の所かけより、もどかしげに蓋を外すと走り書きさ

れた数字の列と、周波数という文字が記載された紙が姿を現した。

「無線機！」

楓は呟きながら87式偵察警戒車の元に駆け寄ると、車体上部に登り夕凧に通信筒と通信文を手渡し、それを確認した夕凧が無線機を操作して周波数を指示された数値に変更する。

「こちら、第1偵察隊所属の佐伯夕凧三尉です。現在練馬より離脱したRCV2台を指揮しています。呼称練馬1。送レ」

夕凧が通信を送ると上空のOH 1からの返答が夕凧のレシーバーにもたらされる。

「練馬1こちらは第4対戦車ヘリコプター隊所属の千早幸弘二尉だ、呼称は木更津2、そちらの状況知らせ、送レ」

「木更津2こちらは練馬1現在我々はRCV2台で編成されている。人員は第1偵察隊所属隊員7名、第1後方支援隊所属隊員3名、生存者1名の総員11名、生存者は洛陽学園の生徒、人員には異常無し、送レ」

「木更津2了、直ちに報告を送り、ヘリの出動を要請する。頑張れよ。送レ」

「練馬1了、宜しく願います。終ワリ」

夕凧は通信を終えると安堵の溜め息をもらしながら、上空のOH 1を静かに見上げていた。

駐屯地（前書き）

呂布サイドで少し時間が戻ります。
ほんのり15禁なので注意して下さい。

駐屯地

習志野駐屯地

0600

朝を迎えた駐屯地に起床ラッパの音が高らかに響き渡り、習志野駐屯地は朝を迎えていた。

駐屯地の外来宿舎で眠りについていた呂布は起床ラッパの音が鳴り響く中、毛布から抜け出すと欠伸をしながら口を開いた。

「っふ、フアアッ…」
「たたく、軍人って奴はどうしてこんなに早起きなよ…」

呂布は欠伸と共に起き出すと、ヘアバンドを手にながら立ち上がりベッド脇の姿見の所に脚を進める。

瑞々しくはち切れんばかりに魅惑的な肢体を借り物の迷彩Tシャツに下着と言う深夜アニメばりの装いで包んだ呂布は、翡翠のロングヘアを掴み、ツインテールへと纏めながら、寂しげに呟きをもらす。
「いつもなら、陳宮がしてくれてたのに…」

髪を纏め終えた呂布は一瞬暗い表情になるが、直ぐに大きく首を振ると翡翠の瞳に力強い光を宿しながら言葉を続ける。

「待っててね、陳宮、必ず探し出すから…」

呂布が決意の言葉を口にすると、それを合図としたようにドアがノックされ、同時に雅の声が呂布の耳に届く。

「おはよう、呂布ちゃん、制服どうにか乾いたよー」
「サンキュー」

呂布が雅の言葉に応じつつドアを開けると、迷彩服姿の雅が薫と共にドアの前に立っていた。

「うっわー、どこの18禁ゲーム？って格好ね」

呂布の姿を見た雅が苦笑を浮かべながら、呟きをもらすと呂布は肩

を疎めながら言葉を返す。

「着替え無いんだから仕方無いでしょ、まあ、いつもこれに似たような格好で寝てるけど…」

「寝とるんかい…」

雅が呂布の言葉に笑いながらツツコミを入れると、傍らの薫が苦笑しつつ、呂布へ畳んだ制服を渡しながら口を開いた。

「着替え終わったら朝食に行きましょう。脱いだ服は雅に渡してね。」

「了」解

呂布は返事と共に制服を受け取ると二人を部屋に入れ、ドアが閉まった事を確認すると服を脱ぎ始めた。

呂布は迷彩Ｔシャツと下着を手早く脱いで雅に手渡し、自分の下着とミニスカートを身に纏い、更に素肌の上から直接ブレザーを着込む。

そうしてベッドに腰を降ろすと馴れた手つきで両足をルーズソックスで包み込み、靴を履いて準備を終える。

「お待たせ、準備ＯＫよ」

呂布がウィンクしながら声をかけると薫は頷きながら、言葉を返す。
「隊員食堂に案内するわね、雅、呂布さんの着てた服を洗濯機に入れてからこつちに合流して頂戴。」

「ほーい、んじゃ食堂でね、呂布ちゃん」

薫の言葉を受けた雅は受け取った服を手にドアを開けて出て行き、薫は呂布を促しつつそれに続いて部屋を後にした。

隊員食堂

0620

呂布は薫の案内で隊員食堂へと向かうと、途中で合流した雅と共に長い行列に加わりつつ、隊員食堂へ入ると、ご飯、味噌汁、柳葉魚ししゃも

の塩焼き（2匹）、里芋の煮物と言うメニューをお盆に乗せ、並べられている生卵を取りつつ、テーブルへと歩を進めた。

「結構混んでるわね。」

呂布がテーブルに座る迷彩服の集団を見渡しつつ言葉を発すると薫は笑いながら首を振ると言葉を返す。

「今日は少ない方よ、第1空挺団は主力が現在都境の封鎖任務に就いてて駐屯地には3分の1程しか残っていないから…」

そう言いながら薫が里芋を口へと運ぶと呂布はその言葉に頷きつつ味噌汁の入ったお椀を口を含むと温かな味噌汁を喉に流し込んで行く。

そうして三人は食事を進めていったが、その最中に雅が心配そうな表情を浮かべつつ呂布に向けて声をかける。

「ねえ、呂布ちゃん、本当にいいの？」

雅の言葉を受けた呂布は柳葉魚を箸で摘まみながら微苦笑を浮かべつつ、言葉を返す。

「ホント、ゴメン、助けて貰ったのに、こんな我儘言って、でも、決めた事なの…」

「そっか…」

呂布の返答を聞いた雅はそう呟くと笑顔を浮かべながら言葉を重ねる。

「呂布ちゃん、大切なヒトと会える事、祈ってるよ」

「私も祈ってるわ。」

「ウン、ありがとう二人とも…」

雅と薫の言葉を受けた呂布は穏やかな笑顔を浮かべながら頷くと、朝食の残りへと箸をのばして行った。

戦友（前書き）

呂布さんのメインアーム決定です。

戦友

特殊作戦群勤務隊舎

0645

朝食を終えた呂布は、薫と雅に案内されながら特殊作戦群の勤務隊舎へと足を踏み入れ、ゴジラ・コマンドの面々が待機している部屋へと入室して行った。

「お早うございます。」

呂布が入室した事に気付いた長曽我部が微笑と共に言葉をかけると、残る面々も次々に挨拶をして来た。

呂布が軽く微笑しながら片手を掲げる事で応じると、棚倉が応接セツトの椅子に座るよう示し、呂布はそれに従って椅子へと身を沈める。

それを確認した長曽我部は、佐竹にコーヒーを入れるよう声をかけつつ、呂布に向けて改まった様子で言葉を発した。

「それでは、洛陽学園の近くで貴女を降ろします。本当に宜しいんですね。」長曽我部の言葉を受けた呂布は佐竹からコーヒーを受け取りながら、自嘲気味な笑みを浮かべつつ口を開いた。

「ゴメン、折角助けて貰ったのに……」

長曽我部が呂布に言葉を返そうと口を開きかけた時、室内に一人の迷彩服姿の自衛官が入り込んで来た。

「気をつけ……!」

それを確認した長曽我部が鋭い号令を発すると、ゴジラ・コマンドの隊員達が弾かれたように立ち上がると直立不動の体勢をとった。

「構わん。楽にしろ。」

入室した迷彩服姿の自衛官は長曽我部達に声をかけると、呂布の方に視線を向け、丁寧な動作で敬礼を送りながら口を開いた。

「特殊作戦群、群長の近藤勇一郎^{（ことだゆういちろう）}一等陸佐です。お話は長曽我部から伺っています。また、東京に戻られるつもりだそうですね。」

呂布は近藤の言葉を受けると頷きながら言葉を返す。

「あたしの我儘なのは分かってる。でも、あたしは陳宮を探したい、自分の手で、だから、愚かと言われても、我儘と貶されても、あたしは東京へ、陳宮の所へ戻ります。」

呂布が翡翠の瞳に真摯な光を宿しつつ応じると、近藤はいかつい顔に微笑を浮かべ、大きく何度も頷きながら言葉を続けた。

「分かりました。そこまで覚悟を決めているのでしたら問題無いでしょう。」

近藤はそう言いながら長曽我部の方に視線を向け、言葉を続けた。

「アレをお渡ししろ。」

近藤の言葉を受けた長曽我部は涼やかな微笑を浮かべながら言葉を返す。

「宜しいのですか？」

「元から渡す気だったのだろう？いくら彼女の戦闘能力が高いからと言っても丸腰で行かせる訳にはいかん、それに製造元のドイツもゾンビ対策に大わらわの状態らしいからな……」

長曽我部は近藤の返答に頷くと、呂布に視線を向けながら口を開いた。

「ついて来て下さい。お渡ししたいものがあります。」

長曽我部はそう言うのと呂布を促しながら部屋を出て、武器庫の前へと歩を進めた。

目的地についた長曽我部は武器庫の鍵を開けると、厚い鉄製の引戸を開き内部に入ると並べられた銃器の中から見慣れぬ形状のアサルトライフルを手に取り、射撃後の整備用におかれたテーブルの上に静かに置きながら口を開いた。

「これをお渡しします。」

呂布は長曽我部の言葉を受けると滑らかで何処と無く曲線的な印象を感じさせるアサルトライフルを手に取ると、銃床を肩付けしながら

ら眩きをもらした。

「凄く自然に構えられるわね。身体にフィットしてるわ。」

呂布が感想を述べると長曽我部は頷きながら口を開いた。

「H & K（ヘッケラー & コツホ）社がアメリカ軍の次期主力小銃用に開発した試製アサルトライフルXM 8です。我々特戦群でも現在使用しているM 4の更新候補の一つとして数丁購入しテストを実施しています。」

「ちよつと、そんな物渡していいの？」

長曽我部の言葉を受けた呂布が呆れ顔で言葉を返すと、長曽我部は小さく肩を竦めながら言葉を返す。

「近藤一佐も言っていました。製造元であるドイツにもゾンビが出現していて対応に大わらわな状態になってしまってますね。H & K社としてもG 36やHK 416、417等の既に生産ラインが確立されている銃器類の生産に全力をあげざるを得ない状態になっています。XM 8は一度はアメリカ軍が正式採用する事が決定されましたが、海兵隊と特殊部隊が猛反発した結果、採用が白紙撤回されてしまい宙ぶらりんな存在になってしまっています。わざわざ自衛隊の為に量産してくれるとは思えませんね。」

長曽我部の言葉を受けた呂布は流麗なデザインで見るからに高性能そうな外見のXM 8をマジマジと見詰めると、首を傾げながら口を開いた。

「白紙撤回って、そんなに性能悪い銃なの？あたしにはそう見えなんだけど…」

「まさか、H & K社が自社製の高性能アサルトライフルであるG 36を更に発展させたアサルトライフルですよ、性能に対して疑問を抱く事が罪になるような代物ですよ。自国製のM 4の改良型であるHK 416や417はまだ我慢出来るが、完全なドイツ製であるコイツの採用はプライドが許さない…と言うのが真相じゃないですかね。」

長曽我部の返答を聞いた呂布は呆れたような表情を浮かべつつ、感

想を述べる。

「アメリカ軍って、意外に度量の低い連中なのね。」

呂布はそう言いながら不敵な笑みを浮かべていたが、次の瞬間には微笑を穏やかな物へと変えながら口を開いた。

「ホント、ゴメン、何から何まで……」

「気にする必要はありません。」

長曽我部は呂布の言葉に対して頭を振りながら応じると、真剣な表情を浮かべつつ言葉を続けた。

「貴女は大切なヒトの為、敢えて地獄へ戻る事を選択した。我々が貴女に出来る事はこれ位ですよ。」

長曽我部の言葉を受けた呂布が小さく頷いた瞬間、武器庫にゴジラ・コマンドの面々が入室して来ると皆を代表して羽島が口を開く。

「先程偵察飛行をしていた第4対戦車ヘリコプター隊のOH 1から緊急連絡が入りました。都内で第1偵察隊所属のRCV2台が発見され乗員の自衛官10名と、途中で保護された生存者1名が確認されました。」

羽島は一度言葉を区切ると呂布に視線を向け、微笑を浮かべながら言葉を続ける。

「生存者は洛陽学園の生徒でゾンビの襲撃を一人で潜り抜けていた所をRCVに救助されたそうです。」

羽島の言葉を受けた呂布の表情が一気に明るい物となり、その様子を見た羽島が更に言葉を重ねる。

「確認して見る価値はあると思いますよ。」

長曽我部は羽島の言葉に頷くと羽島に視線を向けながら口を開く。

「第102への連絡は？」

「御子柴が行っています。ドアガンを一丁降ろし、收容用のキャパシティを確保してもらおう用伝えています。雅と佐竹は車輛を準備中です。」

長曽我部はその言葉に頷くと呂布に視線を向けながら口を開く。

「お聞きの通りです。我々は直ちに救助活動を実施します。ご同行

をお願い出来ますか？」

呂布は長曽我部の言葉を受けると大きく頷く事で応じ、それを確認した長曽我部は鋭い口調で号令を下す。

「ゴジラ・コマンドは直ちに残存部隊及び生存者の救出に向かう、各自は携行火器を用意した後、車輛に乗車し、ヘリポートに移動し、ヘリにて出撃する。質問は？」

「「無し！！」」

長曽我部の言葉に応じてゴジラ・コマンドの面々が小気味良く応じると長曽我部は頷きながら言葉を続けた。

「事後の行動にかかれ！」

「「事後の行動にかかります！」」

復唱と共にゴジラ・コマンドの面々は素早く自分の個人携行火器を手に取り、素早く細部のチェックを行い、それが終わると次々に武器庫を後に行った。

呂布が彼等が続いて武器庫を出ようとするとMINIMIを抱えた長曽我部が呂布を呼び止めると強化ポリマー製の半透明な弾倉5つを手渡して来た。

「サンキュー」

呂布がそう言いながら弾倉を受け取り、ブレザーのポケットへと擦じ込むと、長曽我部は真摯な表情を浮かべつつ言葉を続ける。

「呂布さん」

「何……」

呂布が真剣な表情で言葉を返すと長曽我部は微笑と共に、言葉を続けた。

「己の中の華一輪、護り抜くこそ乙女華おとめばな」

一旦言葉を区切った長曽我部は涼しげな微笑と共に言葉を重ねる。

「貴女の華、護り抜いて下さい。」

長曽我部の言葉を受けた呂布は大きく頷くと、不敵な微笑を浮かべながら言葉を返した。

「ありがとう」

呂布の言葉を受けた長曾我部は微笑と共に握り拳を呂布に突き出し、呂布もそれに応じて握り拳を重ねる。

「行きましょう。カメラード（戦友）」

「そうね。」

短く言葉を交わした二人は重ねた拳に一瞬力をいれ頷き合いながら武器庫を後にした。

希望と危機（前書き）

場面は陳宮サイドに戻ります。

希望と危機

0740

上空のOH 1から、救助部隊が出撃したとの連絡を受けた夕凧は、安堵の表情を浮かべつつその事を陳宮達に告げ、それを聞いた陳宮達の間にもホッとした空気が流れる。

「よかったあー」

朗報を耳にした萌がそう呟きながら大きな安堵の溜め息をもらすと、陳宮達も安堵の表情を浮かべつつ同意するように小さく頷いた。

「救出部隊は習志野の特殊作戦群から出てくるみたいね。取り敢えずひと安心かしら、皆あと少しだからきあ…」

穏やかな口調で呼び掛けていた夕凧の声が途切れ、不審に思った陳宮達が87式偵察警戒車に視線を向けると、厳しい表情を浮かべた夕凧が無線機を通じて木更津2と交信を続けている姿が確認された。

「……了解。とにかく支援要請を頼みます。送レ」

交信を終えた夕凧は、自分の方を見上げる陳宮達に向けて厳しい表情を浮かべつつ口を開いた。

「木更津2からの緊急連絡よ、ゾンビの大群が接近してるわ…ゾンビは2群に別れ、左右からこの公園に接近中、つまりは挟み撃ちの状態になるわ」

「そ、そんな…」

夕凧の言葉を受けた萌が絶望的な声をあげて頂垂れると、陳宮が萌の傍らに近付き、その肩を元気づけるように叩きつつ口を開く。

「救出部隊は間に合わないんですか？」

「木更津2からの連絡だと間も無くゾンビが視認できるそうよ…間に合いそうも無いわね…」

夕凧は陳宮の言葉に応じると厳しい表情のまま言葉を続ける。

「救出部隊が到着するまで何とか私達だけでゾンビを押さえ込むし

かないわ：公園に入られたら御仕舞いだからこの入口前の道路上に展開してゾンビを迎え撃つわ。」

夕凧の言葉を受けた陳宮は強い決意の表情と共に力強く頷き、陳宮の様子を見た萌も覚悟を決めたように小さく頷く。

「おっし、やってやるわよ！」

「必ず生還する。」

陳宮と萌に続き楓と玖美が決意を露にすると、夕凧は小さく頷きながら無線機を操作して、傍らの練馬2を呼び出した。

「練馬2こちら練馬1、現在ゾンビの大群が両翼よりこちらに向けて接近中、練馬2は練馬1と共に公園入口前に展開し救出部隊到着までの間、ゾンビの迎撃を実施せよ。迎撃区分は練馬1が左翼、練馬2が右翼、質問は？送レ」

「練馬1こちら練馬2、質問は無し、我々が入口を開けます。全員無事に還りましょう。送レ」

「練馬1了、勿論よ。終ワリ」

交信を終えた夕凧は玖美に向けて拡声器を使って声をかける。

「玖美、乗車してエンジン始動！入口が開き次第道路上に展開して、残りは個人携行火器を装備してRCVの周辺に展開して頂戴。」

夕凧の言葉に玖美達が頷くと、陳宮が何かを思い出したような表情を浮かべながら口を開く。

「佐伯さん！佐伯さんの装甲車には齋藤さん達の使ってたバズーカみたいな武器は無いんですか？」

陳宮の言葉を受けた夕凧は、怪訝そうな面持ちになりながら言葉を返す。

「カール君の事？勿論積んであるけど…つまさか、撃つ気なの！？」夕凧が驚きながら言葉を発すると陳宮は真剣な表情で頷きを返し、夕凧は苦笑と共に頷きながら口を開く。

「まあ、仕方無いわね、萌、後部偵察員席の横に収納ボックスがあるからそれを開けてカール君を陳宮ちゃんに渡して、砲弾収納スペースに高性能榴弾3発が収納されてるから誰か…」

夕凧がそこまで言うと言いつつ楓が手を上げながら口を開く。

「あたし、カール君の実弾射撃訓練に参加して装填手をした事があります！」

「OK、楓お願い！」

夕凧の言葉が続く間に萌が収納ボックスからカール・グスタフを取り出し、重さに顔をしかめながら車外へと運び出してきた。

「陳宮ちゃん、だ、大丈夫？ け、結構重いよこれ……」

萌がそう呟きながらカール・グスタフを手渡すと陳宮は両手でそれを受け取り、しっかりと構えながら感想をもらす。

「少し重いけど、何とかなりそうです。」

「……何だろう、この敗北感……」

「気にしないの……あたし達と陳宮ちゃんじゃ戦闘能力が違いすぎるのよ……」

陳宮の返答を受けた萌が、呟くと砲弾ケースを抱えた楓が砲弾の重さに耐えながら慰めるように声をかける。

夕凧は準備が終わった事を確認すると玖美にエンジンを始動させる。ディーゼル・エンジンがアイドリングを開始する中、夕凧達が準備を終えたのを見計らった練馬2から佐藤三曹と梅本陸士長がカール・グスタフと砲弾ケースを抱えながら地面に降り立ち、柵門にとりつくと言門を大きく開け放った。

「玖美、前進！」

進路が開放されたのを確認した夕凧が号令を下し、それを受けた玖美は87式偵察警戒車を静かに発進させ、入口前の道路上へと進入するとゾンビの接近する方向に前面を向けると車体を停止させる。

「よし、行くよ萌、陳宮ちゃん……」

それを確認した楓は陳宮達に声をかけながら駆け出し、陳宮と萌はそれに続いて足を踏み出し前進を開始した。

87式偵察警戒車の傍らに到着した陳宮達は車体の傍らに一列の横隊を作るとゾンビが接近してくるであろう方向に鋭い視線を向ける。戦闘準備を完了した夕凧達の後方では練馬2が同じ様に展開し、迫

り来るゾンビに対して備えを固めていた。

そして夕風達が戦闘準備を完了して幾らも立たない内に、上空の木更津2からゾンビの群れが更に接近してくる事が伝えられた。

激突（前書き）

戦闘開始です。

激突

木更津2からの報告がもたらされて暫くすると、展開する陳宮達の耳に重なり合った耳障りな呻き声が届き、次いで道路上に夥しい数のゾンビが出現すると覚束無い足取りで陳宮達の方へと近付いて来た。

「練馬2こちら練馬1、ゾンビ出現、そちらはどうか？送レ」

「練馬1こちら練馬2、こちらも接近するゾンビを発見しました。

これより攻撃を開始します。幸運を、送レ」

「練馬1了、こちらも交戦に移行する。絶対生き残るわよ！終ワリ」手早く交信を終了した夕凧は双眼鏡を使って近づくゾンビの様子を確認すると、傍らでカール・グスタフを構えている陳宮に向けて拡声器を使用して声をかける。

「陳宮ちゃん、先ず私達が距離600でRCVの機関砲を使ってゾンビの群を掃射するわ。陳宮ちゃんはゾンビの先頭が道路に放置されてる軽トラの辺りにさしかかったらカール君を奴らの鼻先に叩きこんで頂戴、砲弾は3発しかないから陳宮ちゃんは全弾を射ち尽くしたら、萌から89式小銃を受け取って小銃射撃を実施して貰うわね。」

夕凧は陳宮が頷いたのを確認すると、視線をゾンビの群へと戻しつつ、砲塔内の美鈴に向けて車内通話を利用して声をかけた。

「美鈴、機関砲の準備はどう？」

「準備良し、何時でもいけます。」

美鈴の返答を耳にした夕凧は、迫り来るゾンビを見据えながら攻撃命令を下す。

「砲手、機関砲、前方600ゾンビ先頭挺団、テエツ！！」

「発射！」

夕凧の号令を受けた美鈴が即座に射撃を開始すると砲塔から突き出た25ミリ機関砲の砲口にマズル・フラッシュの閃光が閃き、25

ミリ機関砲弾が近づくゾンビ目掛けて迸り出た。

着弾した機関砲弾がゾンビの身体を手荒く穿ち抜き、吹き飛ばされた身体の一部が空中に飛ばされる。

ゾンビを外れた25ミリ機関砲弾は放置された事故車や道路脇のブロック壁を打ち砕き、破片が空中を舞う。

凄まじい射撃を受けたゾンビが次々に射ち倒されていくが、ゾンビ達は委細構わずに前進を続ける。

練馬1から少し離れた位置に展開した練馬2も25ミリ機関砲による射撃を開始し、けたたましい射撃音が周囲に鳴り響く中、陳宮はカール・グスタフを構え、接近してくるゾンビの集団の先頭を照準スコープに捉えた。

陳宮の傍らに控えた楓は萌が自分達の近くにいる事を確認すると、砲弾ケースから高性能榴弾を取り出しながら陳宮の耳元に口を近付けながら口を開く。

「陳宮ちゃん、行くよっ！！あたしが陳宮ちゃんの肩を叩いたらカール君のトリガーを引いて頂戴！」

「分かりました！！」

楓は陳宮の言葉を受けると高性能榴弾をカール・グスタフに装填し、もう一度後方を確認し、後方爆風圏内に誰もいないことを確認すると陳宮の肩を強く叩き、それを受けた陳宮は静かにトリガーを引き絞る。

刹那発射音と共に陳宮達の後方が灼熱の発射ガスで包まれ、砲口から飛び出した84ミリ無反動砲弾がゾンビの先頭集団に叩きこまれ炸裂する。

発生した爆発に数体のゾンビが吹き飛ばされ、破片を浴び頭部を破壊されたゾンビが折り重なって倒れていく。

弾着を確認した楓は手早く次弾を装填すると、陳宮の肩を再び強く叩き、陳宮の構えるカール・グスタフが再び咆哮をあげ高性能榴弾をゾンビの只中に炸裂させる。

立て続けに炸裂した2発の高性能榴弾が近づくゾンビの先頭集団を

粗方吹き飛ばし陳宮と楓が一息つくと後方でも激しい爆発音が発生する。

「よし、最後の1発よ、なるたけゾンビが群れてる所にぶちこんでやりましょう。」

楓の言葉を受けた陳宮はカール・グスタフを構え直すと再び接近を開始したゾンビの群へと砲口を向け、数が多そうな地点に照準を合わせる。

それを確認した楓が最後の高性能榴弾を装填し、周囲の安全を確認した後に陳宮の肩を叩き、陳宮は最後の高性能榴弾をゾンビの集団に叩きこみ、数体のゾンビを纏めて吹き飛ばした。

陳宮は、高性能榴弾を射ち尽くし無用の長物となったカール・グスタフの本体を、87式偵察警戒車の車体後部に放り投げ、それを確認した萌が、肩に吊っていた89式小銃を外して陳宮へと差し出して来た。

陳宮が頷きながら89式小銃を受け取ると、砲塔上の夕凧が拡声器を使用して声をかけてきた。

「小銃射撃は距離200から実施するわ、目安は道路脇の電柱に突っ込んでる黒の四駆よ！ゾンビがそこに到着したら直ちに射撃を開始しなさい！！」

夕凧の言葉を受けた陳宮達はその言葉に頷きながら各々が装備する武器を構え、ゾンビが接近してくるのを待ち構えた。

道路上に展開した2台の87式偵察警戒車は、装備する25ミリ機関砲と7・62ミリ機銃の激しい射撃をを浴びせかけてゾンビを薙ぎ払って行くが、ゾンビは尽きる事を知らないかのように姿を現して行き、ジリジリと防衛ラインに接近して来ていた。

「マズいな、このままじゃ押し切られるぞ。」

上空のOH 1の操縦席で千早が焦燥の呟きをもらしているとレシーバーに待ち望んだ報告がもたらされた。

「木更津2こちらパープル・ヴァイパー、戦闘地域に接近中よ、状況を報告して、送レ」

通信を受けた千早は安堵の表情を浮かべながらレシーバーを通して
接近して来るパープル・ヴァイパーに向けて言葉を返した。

増援（前書き）

少し短目です m (m

増援

パープル・ヴァイパー

「パープル・ヴァイパーこちら木更津2、デルタ D17、フォックスロット F38ポイントにてゾンビと第1偵察隊残存部隊、練馬1が交戦中、ゾンビは2方向より接近中、至急来援されたし。送レ」
木更津2からの報告を受けた陽華は小さく舌打ちをすると、即座に言葉を返した。

「パープル・ヴァイパー了、すつ飛ばして向かうわ、終ワリ」

通信を終えた陽華は、操縦桿を操りながら無線機の周波数を切り替えると、愛機の傍らを飛行しているOH 1に向けて通信を送る。

「ハンドレッド・アイこちらパープルヴァイパー、聞いた通りよ。先行して偵察データーを収集して頂戴。送レ」

「パープル・ヴァイパーこちらハンドレッド・アイ、了解した。直ちに前進する。送レ」

「パープル・ヴァイパー了、終ワリ」

交信が終わると同時にOH 1が加速を始め、交戦地域に向けて前進を開始する。

陽華はそれを見詰めながら機内通話を利用して、前方のガナー席に座る雪菜に向けて声をかけた。

「ユツキー、準備は大丈夫？」

「問題ありません。」

陽華は雪菜の言葉に頷くと、苦笑を浮かべながら口を開いた。

「人気者はつらいわね、ゴジラ・コマンドや神奈川方面都境封鎖ラインへの航空支援、一夜明ければ残存部隊援護の為の緊急発進スクランブルあたしもヴァイス・ウーフも大忙しね。」

ガナー席に座る雪菜は、陽華のぼやきに対して、前方を見据えたまま冷静な口調で言葉を返す。

「仕方無いですね。戦闘ヘリコプターはゾンビに対して有効な存在ですが、有効過ぎて絶望的に数が足りないのが現状です。」

「まあ、そうなのよね。」

雪菜の言葉を受けた陽華は、諦念の入った微笑を浮かべつつそれに応じた。

陸上自衛隊の保有する戦闘ヘリコプターは、A H 1 S「コブラ」90機と陽華達の愛機でもあるA H 64 D「ロングボウ・アパッチ」13機の合計103機であり、A H 1 S装備の5個対戦車ヘリコプター隊が北部（第1対戦車ヘリコプター隊・帯広）、東北（第2対戦車ヘリコプター隊・八戸）、東部（第4対戦車ヘリコプター隊・木更津）、中部（第5対戦車ヘリコプター隊・明野）、西部（第3対戦車ヘリコプター隊・目達原）の各方面隊に配属され、陽華達の所属するA H 64 D装備の第666対戦車ヘリコプター隊が中央即応集団（第1空挺団、第1ヘリコプター団、特殊作戦群、中央即応連隊基幹）に配属されていた。

当初からゾンビ対策に有効だと判断されていた戦闘ヘリコプター部隊の運用に関して、緊急対処計画QZでは各方面隊の警戒区分に囚われない弾力的運用を計画しており、ゾンビの大量発生と同時に各部隊が行動を開始した。

現在、東京方面には東部方面隊所属の第4対戦車ヘリコプター隊と東北方面隊から急派された第2対戦車ヘリコプター隊が投入され、それに加えて海上自衛隊との協議の結果臨時の戦闘ヘリコプター母艦として運用される事となった航空護衛艦「ひゅうが」に展開した第666対戦車ヘリコプター隊も作戦行動を実施している。

一方、名古屋・大阪の両方面では、中部方面隊所属の第5対戦車ヘリコプター隊が名古屋方面に、更に西部方面隊より派遣された第3対戦車ヘリコプター隊が大阪方面に、それぞれ投入されている。

更に、ゾンビの浸透が最も激しい東京方面への増援として、海上自衛隊は青森県の大湊基地に航空護衛艦「いせ」を派遣、彼女は同地で北部方面隊が派遣した第1対戦車ヘリコプター隊を登載し、それ

が完了次第直ちに東京湾へ急行する予定となっている。

当初の想定通り、ゾンビに対して有効な存在であった戦闘ヘリコプターだったが、有効であるが故に出動要請の頻度も高く、各部隊ともかなりの頻度で出撃を重ねていった。

特に陽華達の第666対戦車ヘリコプター隊は装備機種が全天候型戦闘ヘリコプターのAH 64Dである事もあり、出撃回数も相当な頻度に達している。

陽華は軽く首を振ると、後方を進むヴァイス・ウーファーに向けて通信を送る。

「ヴァイス・ウーファーこちらパープル・ヴァイパー、ハンドレッド・アイからの偵察データを受け取り次第、直ちに行動を開始するわよ。公園は救出ヘリのLZだから流れ弾には充分注意してね。送レ」

「パープル・ヴァイパー、こちらヴァイス・ウーファー、了解しました。送レ」

「パープル・ヴァイパー了、んじゃ行くよ。終ワリ」
交信を終了した陽華は愛機を前進させながら、先行したハンドレッド・アイからの報告を静かに待ち構えていた。

航空支援（前書き）

少し短めです。

航空支援

練馬 1

ゾンビの群は激しい射撃を浴びながらも、漣さざなみが迫る様に近付き、87式偵察警戒車の傍らの陳宮達も89式小銃や64式小銃を構えて射撃態勢を整えている。

状況を確認した夕凧が、渋面を作りながらゾンビの群を見詰めていると、1機のOH 1がローター音を響かせながら夕凧達の上空を通過し、迫り来るゾンビの群の上空に到達すると高度を上げてホバリングを開始した。

「練馬1こちら木更津2、只今到着したOH 1は東京湾の「ひゅうが」から発進した第666対戦車ヘリコプター隊のOH 1だ。もうすぐ666のアパッチが到着する。もう少し粘れ！終ワリ」
木更津2からの通信を受けた夕凧は、安堵のため息をもらしながら拡声器を手に取ると、射撃態勢を整えている陳宮達に向けて声をかけた。

「もうすぐ援軍が到着するわ！！みんな後少し、気合い入れて乗り切るわよ。」

夕凧の声を受けた陳宮達が力強く頷くと、それを合図としたように新たなローター音が響き渡り、2機のAH 64Dが到着した。

パープル・ヴァイパー

上空に到着した陽華は、先行したOH 1から送信されたデータを確認すると、叩きつけるように鋭い口調で命令を下す。

「ヴァイス・ウーファーこちらパープル・ヴァイパー、二手に別れて攻撃を実施する。ゾンビ後方挺団に対してはロケット弾、先頭挺団に対してはガンを使用して頂戴、公園はLZだから誤射厳禁、射界

には充分注意する事、質問はある？送レ」

「パープル・ヴァイパーこちらヴァイス・ウーファー、質問はありません、送レ」

「パープル・ヴァイパー了、攻撃開始せよ！終ワリ」

陽華は命令を下すと同時に、操縦桿を操作して愛機を前進させると、道路上に展開する練馬1の上空をフライパスして接近中のゾンビの群へと接近して行く。

前列のガンー席に座る雪菜は、愛機が公園を通過したのを確認すると同時にトリガーを操作しながら口を開く。

「ファイヤー！！」

刹那、A H 64 Dの短翼に装着されたA S Rから無誘導式ロケット弾が発射され、ゾンビの群の只中で炸裂する。

紅蓮の炎がゾンビの群の只中で次々に炸裂し、無数のゾンビが粉碎され薙ぎ倒されて行く。

路上に放置された事故車や街路樹までもが爆砕される中、陽華はA H 64 Dを前進させてゾンビの群の上空を突き抜けると、機体を僅かに右に傾けると機首を翻えし、公園をロケット弾の射線に入れないように角度をつけつつ機首をゾンビの群に向け、それを確認した雪菜が即座にトリガーを操作してロケット弾をゾンビの群に叩き込む。

「ロケット弾射耗」

雪菜の声を受けた陽華は再び前進を開始し、公園付近の上空へとA H 64 Dを誘い、機首を巡らしてゾンビの群を捉える。

「ユツキー！」

「ファイヤー！！」

陽華の言葉を受けた雪菜が、叩き付けるように言いながらトリガーを操作すると、A H 64 Dの機首下面に装備された30ミリチェーインガンの銃口からマズル・フラッシュの閃光が進り、巨大な30ミリ機関砲弾が濁流となってゾンビの群に降り注ぎ、周囲の物体までも巻き込みながらゾンビを粉碎して行く。

練馬2の方に向かったヴァイス・ウーフも圧倒的な火力を発揮してゾンビを薙ぎ倒して行き、周平は連続する爆発音とローター音で満たされていた。

「す…すこ…い」

陳宮が、圧倒的な火力を発揮するAH 64Dを見上げながら感嘆の呟きをもらしていると、無線機で交信を続けていた夕凧が砲塔から身を乗り出し、拡声器を使って声をあげつつ上空を指差した。

「皆！！収容ヘリが到着したわ！！」

待ち望んだ言葉を受けた陳宮達が視線を夕凧の指先に向けると、4機のUH 60JAが、ローター音を響かせながらこちらに向かって接近してくるのが確認された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3220n/>

翡翠の龍・碧の姫

2010年10月21日08時20分発行